



Sun N1 Service Provisioning System ユーザーズガイド (BEA Weblogic 9 Plug-in 1.0)



Sun Microsystems, Inc.
4150 Network Circle
Santa Clara, CA 95054
U.S.A.

Part No: 819-6666-10
2006年5月

本製品およびそれに関連する文書は著作権法により保護されており、その使用、複製、頒布および逆コンパイルを制限するライセンスのもとにおいて頒布されます。サン・マイクロシステムズ株式会社の書面による事前の許可なく、本製品および関連する文書のいかなる部分も、いかなる方法によっても複製することが禁じられます。

本製品の一部は、カリフォルニア大学からライセンスされている Berkeley BSD システムに基づいていることがあります。UNIX は、X/Open Company, Ltd. が独占的にライセンスしている米国ならびに他の国における登録商標です。フォント技術を含む第三者のソフトウェアは、著作権により保護されており、提供者からライセンスを受けているものです。

U.S. Government Rights Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

本製品に含まれる HG-MinchoL、HG-MinchoL-Sun、HG-PMinchoL-Sun、HG-GothicB、HG-GothicB-Sun、および HG-PGothicB-Sun は、株式会社リコーがリョービマジクス株式会社からライセンス供与されたタイプフェースマスタをもとに作成されたものです。HeiseiMin-W3H は、株式会社リコーが財団法人日本規格協会からライセンス供与されたタイプフェースマスタをもとに作成されたものです。フォントとして無断複製することは禁止されています。

Sun、Sun Microsystems、docs.sun.com、および Java は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標、登録商標もしくは、サービスマークです。

サンのロゴマーク、Solaris のロゴマーク、Java Coffee Cup のロゴマーク、および Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。

すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャに基づくものです。

OPENLOOK、OpenBoot、JLE は、サン・マイクロシステムズ株式会社の登録商標です。

Wnn は、京都大学、株式会社アステック、オムロン株式会社で共同開発されたソフトウェアです。

Wnn6 は、オムロン株式会社、オムロンソフトウェア株式会社で共同開発されたソフトウェアです。Copyright OMRON Co., Ltd. 1995-2000. All Rights Reserved. © Copyright OMRON SOFTWARE Co., Ltd. 1995-2002 All Rights Reserved. ©

「ATOK」は、株式会社ジャストシステムの登録商標です。

「ATOK Server/ATOK12」は、株式会社ジャストシステムの著作物であり、「ATOK Server/ATOK12」にかかる著作権その他の権利は、株式会社ジャストシステムおよび各権利者に帰属します。

「ATOK Server/ATOK12」に含まれる郵便番号辞書(7桁/5桁)は日本郵政公社が公開したデータを元に制作された物です(一部データの加工を行なっています)。

「ATOK Server/ATOK12」に含まれるフェイスマーク辞書は、株式会社ビレッジセンターの許諾のもと、同社が発行する『インターネット・パソコン通信フェイスマークガイド』に添付のものを使用しています。

Unicode は、Unicode, Inc. の商標です。

本書で参照されている製品やサービスに関しては、該当する会社または組織に直接お問い合わせください。

OPEN LOOK および Sun Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカル・ユーザインタフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは、OPEN LOOK のグラフィカル・ユーザインタフェースを実装するか、またはその他の方法で米国 Sun Microsystems 社との書面によるライセンス契約を遵守する、米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われぬものとします。

本製品が、外国為替および外国貿易管理法(外為法)に定められる戦略物資等(貨物または役務)に該当する場合、本製品を輸出または日本国外へ持ち出す際には、サン・マイクロシステムズ株式会社の事前の書面による承諾を得ることのほか、外為法および関連法規に基づく輸出手続き、また場合によっては、米国商務省または米国所轄官庁の許可を得ることが必要です。

原典: Sun N1 Service Provisioning System User's Guide for BEA WebLogic 9 Plug-in 1.0

Part No. 819-4453-10

目次

はじめに	7
1 WebLogic 9 プラグインの概要	11
WebLogic 9 プラグインの目的	11
WebLogic 9 プラグインに含まれる項目	11
WebLogic 9 プラグインを使用するための要件	13
2 WebLogic 9 プラグインのリリースノート	15
インストール上の問題	15
実行時の問題	15
既存の JMS Queues、Connection Factories、および Topics のデフォルトインストール で、管理コンソールの状態が有効のままになる場合がある (6418393)	15
3 WebLogic 9 プラグインのインストールと構成	17
WebLogic 9 プラグインの入手	17
Solaris への WebLogic 9 プラグインの追加	18
▼ Solaris 用の WebLogic 9 プラグインパッケージを追加する	18
Linux への WebLogic 9 プラグインの追加	18
▼ Linux 用の WebLogic 9 プラグインパッケージを追加する	18
Windows への WebLogic 9 プラグインの追加	18
▼ Windows 用の WebLogic 9 プラグイン MSI ファイルを追加する	19
Sun N1 Service Provisioning System への WebLogic 9 プラグインの追加	19
▼ ブラウザインタフェースを使用して WebLogic 9 プラグインをインポートする	19
▼ CLI を使用して WebLogic 9 プラグインをインポートする	20
▼ WebLogic ソフトウェアをインストールする	20
WebLogic 9 プラグインへのパッチの適用	24

4 WebLogic 9 プラグイン用の環境設定	25
Sun N1 Service Provisioning System を使用した WebLogic 9 環境のインストール方法および使用方法	25
プラグインの規定	25
グローバルな必要条件	26
処理の概要	27
WebLogic インフラストラクチャーの作成	28
WebLogic 9 ドメインおよび管理サーバーの作成	28
▼ WebLogic 9 ドメインと管理サーバーを作成する	28
管理対象サーバーの作成	33
▼ WebLogic 管理対象サーバーを作成する	33
WebLogic クラスタの作成	37
▼ WebLogic クラスタを作成する	38
▼ クラスタメンバーを作成する	41
WebLogic マシンの作成	42
▼ WebLogic マシンを作成する	42
▼ N1 SPS 環境に既存の WebLogic マシンを組み込む	46
▼ ドメインに WebLogic マシンを登録する	48
WebLogic ドメイン、サーバー、およびクラスタの管理	49
WebLogic ドメインと管理サーバーの管理	50
▼ WebLogic ドメインと管理サーバーを削除する	50
▼ WebLogic ドメインまたは管理サーバーを起動する	51
WebLogic クラスタの管理	52
▼ クラスタを起動または停止する	52
▼ WebLogic クラスタを削除する	53
▼ WebLogic クラスタメンバーを削除する	54
WebLogic マシンの管理	54
▼ Node Manager マシンを起動する	54
▼ Node Manager マシンを停止する	55
▼ ドメインから Node Manager マシンを削除する	55
▼ Node Manager マシンをアンインストールする	56
WebLogic 管理対象サーバーの管理	57
▼ 管理対象サーバーを起動する	57
▼ 管理対象サーバーを停止する	58
▼ 管理対象サーバーを削除する	58
▼ 管理対象サーバーに追加 CLASSPATH 要素を追加する	59

5 WebLogic 9 プラグインを使用したアプリケーションの配備と管理	61
WebLogic アプリケーションの取得と編集	61
▼ アプリケーションアーカイブを取得する	62
▼ 配備プランを取得する	63
▼ 共有 J2EE ライブラリを取得する	64
▼ アプリケーションアーカイブと配備プランをコンテナにグループ化する	65
WebLogic アプリケーションの配備	69
▼ アプリケーションをインストールする	70
▼ 共有 J2EE ライブラリをインストールする	74
▼ アプリケーションを起動する	76
▼ アプリケーションを停止する	78
▼ アプリケーションをアンインストールする	79
▼ 以前のバージョンのアプリケーションをアンインストールする	80
▼ アプリケーションを更新する	81
▼ Application Archive With Plan コンポーネントの Deployment Plan を更新する	83
エラー状態	84
WebLogic アプリケーションのサービスの構成	85
構成サービスの作成	86
▼ 構成サービスを作成する	86
▼ JMS Module を構成する	87
構成サービスのインストール	89
▼ 構成サービスをインストールする	90
構成サービスのアンインストール	92
▼ 構成サービスをアンインストールする	92
WebLogic 構成コンポーネントタイプと変数	93
CLI を使用した WebLogic の作業	96
Sun N1 Service Provisioning System コマンド行インタフェースの使用法	96
WebLogic コマンド行インタフェースの使用法	96
▼ Sun N1 Service Provisioning System を介して WebLogic コマンド行インタフェースを 使用する	96
Sun N1 Service Provisioning System 内での WebLogic Server Scripting Tool の使用法	98
▼ WebLogic スクリプトコンポーネントを作成する	98
▼ WebLogic スクリプトコンポーネントをインストールする	99
プランの使用法	100
障害追跡	100
WebLogic のインストールのエラーメッセージの例	101

A	高度なドメイン管理作業	103
	異なるパスワードでのドメインの作成	103
	▼異なるパスワードを使用して複数のドメインを作成する	103
	ドメインに対する変更の管理	104
	▼ドメインおよび管理サーバーに対する変更を管理する	104
	索引	107

はじめに

このマニュアルでは、Sun N1™ Service Provisioning System ソフトウェアを使用して次の作業を行う方法について説明します。

- BEA WebLogic 9 ソフトウェアのインストールとインフラストラクチャーコンポーネントの構成
- WebLogic へのアプリケーションの配備
- WebLogic 環境の構成

対象読者

このマニュアルの主な対象読者は、BEA WebLogic 9 の機能を Sun N1 Service Provisioning System ソフトウェアに組み込む Sun N1 Service Provisioning System ソフトウェアのシステム管理者およびオペレータです。このようなユーザーは、次の内容に関する十分な知識があると想定されています。

- Sun N1 Service Provisioning System 製品
- 標準的な UNIX® と Windows のコマンドとユーティリティー
- BEA WebLogic 9 製品で使用できる一般的な概念と管理機能

お読みになる前に

Sun N1 Service Provisioning System ソフトウェアの使用法に関する十分な知識がないユーザーは、次のマニュアルを参照してください。

- 『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 システム管理者ガイド』
- 『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 オペレーションとプロビジョニングガイド』

マニュアルの構成

第1章では、プラグインソリューションの概要を説明します。

第2章では、インストールと実行時の問題について説明します。

第3章では、プラグインのインストールおよび構成の方法について説明します。

第4章では、N1 SPS ソフトウェアで、WebLogic サーバーインフラストラクチャーを取得して配備する方法について説明します。

第5章では、プラグインを介したアプリケーションとファイルの取得および配備の方法を説明し、プラグインに付属する特定のコンポーネントタイプについて説明します。

付録A では、WebLogic ドメインで高度な設定および管理作業を行う方法について説明します。

Sun 以外の Web サイト

このマニュアル内で参照している Sun 以外の URL は、追加の関連情報を提供します。

BEA WebLogic 9 製品のマニュアルについては、<http://e-docs.bea.com/wls/docs90/> を参照してください。

注 - このマニュアル内で引用する Sun 以外の Web サイトの可用性については、Sun は責任を負いません。Sun は、これらのサイトあるいはリソースに関する、あるいはこれらのサイト、リソースから利用可能であるコンテンツ、広告、製品、あるいは資料に関して一切の責任を負いません。こうしたサイトやリソース上で、またはこれらを経由して利用できるコンテンツ、製品、サービスを利用または信頼したことによって発生した (あるいは発生したと主張される) 実際の (あるいは主張される) 損害や損失についても、Sun は一切の責任を負いません。

マニュアル、サポート、およびトレーニング

Sun の Web サイトでは、以下の追加情報を提供しています。

- マニュアル (<http://jp.sun.com/documentation/>)
- サポート (<http://jp.sun.com/support/>)
- トレーニング (<http://jp.sun.com/training/>)

表記上の規則

このマニュアルでは、次のような字体や記号を特別な意味を持つものとして使用しません。

表 P-1 表記上の規則

字体または記号	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例を示します。	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。 machine_name% you have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して示します。	machine_name% su Password:
AaBbCc123	変数を示します。実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	ファイルを削除するには、rm filename と入力します。
『』	参照する書名を示します。	『コードマネージャ・ユーザーズガイド』を参照してください。
「」	参照する章、節、ボタンやメニュー名、強調する単語を示します。	第5章「衝突の回避」を参照してください。 この操作ができるのは、「スーパーユーザー」だけです。
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	sun% grep '^#define \ XV_VERSION_STRING'

コード例は次のように表示されます。

- C シェル

```
machine_name% command y|n [filename]
```

- C シェルのスーパーユーザー

```
machine_name# command y|n [filename]
```

- Bourne シェルおよび Korn シェル

```
$ command y|n [filename]
```

- Bourne シェルおよび Korn シェルのスーパーユーザー

```
# command y|n [filename]
```

[] は省略可能な項目を示します。上記の例は、*filename* は省略してもよいことを示しています。

| は区切り文字 (セパレータ) です。この文字で分割されている引数のうち 1 つだけを指定します。

キーボードのキー名は英文で、頭文字を大文字で示します (例: Shift キーを押します)。ただし、キーボードによっては Enter キーが Return キーの動作をします。

ダッシュ (-) は 2 つのキーを同時に押すことを示します。たとえば、Ctrl-D は Control キーを押したまま D キーを押すことを意味します。

WebLogic 9 プラグインの概要

この章では、Sun N1 Service Provisioning System を使用した BEA WebLogic 9 アプリケーションのプロビジョニングに関する一般的な情報について説明します。この章は、次の内容で構成されています。

- 11 ページの「WebLogic 9 プラグインの目的」
- 11 ページの「WebLogic 9 プラグインに含まれる項目」
- 13 ページの「WebLogic 9 プラグインを使用するための要件」

WebLogic 9 プラグインの目的

Sun N1 Service Provisioning System ソフトウェアは、BEA WebLogic 9 アプリケーションをサポートする高度な機能を提供します。プロビジョニングソフトウェアを使用してドメイン、管理対象サーバーおよびクラスタをインストールすることにより、WebLogic 9 インフラストラクチャーをプロビジョニングできます。複数のコンポーネントのインストールを組み合わせた配備プランを作成できます。これらのプランを実行すると、配備するアプリケーションとともにドメイン全体をインストールできます。

いったんインストールすれば、管理対象サーバーとドメインを起動/停止することにより、WebLogic 環境を管理できます。また、既存のアプリケーションをブラウズして、以前にインストールしたアプリケーションを取得したり、企業全体にこれらのアプリケーションを配備することもできます。

WebLogic 9 プラグインに含まれる項目

WebLogic 9 プラグインには、WebLogic Enterprise アプリケーション、Enterprise JavaBeans™ (EJB™) 技術アプリケーション、および Web アプリケーションの取得、構成、配備を簡易化する定義済みコンポーネントとリソースファイルのほかに、WebLogic 固有のコンポーネントタイプがいくつか含まれます。これらのコンポーネントタイプは次の 3 つのファミリーに分類できます。

- WebLogic ソフトウェアをインストールするコンポーネント

- WebLogic インフラストラクチャーをサポートする次のコンポーネント
 - WebLogic 管理サーバー
 - WebLogic 管理対象サーバー
 - WebLogic Node Manager マシン
 - WebLogic クラスタ
- エンタープライズアプリケーション、Web アプリケーション、および Java アーカイブ ファイルをインストールするためのプラン。
- WebLogic 9 アプリケーションサーバー上で配備を行うため、アプリケーションを配備 および取得する特別なコンポーネント
- WebLogic 9 サービス構成用の特別なコンポーネントタイプ。
 - データソース - データソースを取得、編集、および配備できるようにする。
 - マルチ データソース - 関連付けられた接続プールおよびマルチプールとともに データソースを取得、編集、および配備できるようにする。
 - JMS Server - JMS (Java Messaging Service) サーバーを取得、編集、および配備できるようにする。
 - JMS Queue - JMS Queue を配備できるようにする。
 - JMS Topic - JMS Topic を取得、編集、および配備できるようにする。
 - JMS Module - JMS Module コンテナで、JMS Queues および Topics を取得、構成できるようにする。
 - JMS File Store - JMS File Store を取得、編集、および配備できるようにする。
 - JMS JDBC Store - JMS JDBC Store を取得、編集、および配備できるようにする。
 - JMS Connection Factory - JMS Connection Factory を取得、編集、および配備できるようにする。
 - JMS Destination Key - JMS Destination Key を取得、編集、および配備できるようにする。
 - メールセッション - メールセッションを取得、編集、および配備できるようにする。
 - WLScript - プロビジョニングシステムのインタフェース経由で WebLogic コマンド を実行できるようにする。

WebLogic 9 プラグインには、WebLogic 管理サーバー、WebLogic 管理対象サーバー、WebLogic マシン、およびクラスタをインストールおよび削除するいくつかのプランも含まれています。

WebLogic 9 プラグインを使用するための要件

WebLogic 9 プラグインは、次のプラットフォームの WebLogic Server Version 9.1 をサポートしています。

- SPARC/x86 版 Solaris 9
- x86 版 Solaris 10
- RedHat Linux AS 3.0
- RedHat Linux 4.0
- SuSE Linux 9.0

WebLogic 9 プラグインの配備先ホストは、次の要件を満たす必要があります。これらの要件は、インストールに関する最低限の必要条件です。

ディスク容量

UNIX システムでは、インストールされる製品には約 375M バイトの空きディスク容量が必要です。

/var/tmp ディレクトリには、インストーラにより約 1G バイトの一時ディスク容量が必要です。/var/tmp フォルダに空き容量が存在しない場合、altTempDir コンポーネント変数を使用して別の一時ディレクトリを作成します。詳細は、[20 ページの「WebLogic ソフトウェアをインストールする」](#)を参照してください。

RAM

512M バイト (最低限)、1G バイト (推奨)

Java run-time environment(JRE)

WebLogic Server のインストールプログラムは、実行に JRE が必要です。次の要件は、サポートされる構成の BEA のリストから要約したものです。詳細なリストについては、[BEA の WebLogic 9.1 製品マニュアルの Web サイト](#)を参照してください。

プラットフォームが、.bin バイナリインストールを使用する場合は、JRE は必要ありません。

表 1-1 JRE の要件

	すでにインストールされている Java SDK	インストールに含まれる
RedHat Linux		Sun Java 2 SDK 1.5.0_04
Solaris x86	Sun Java 2 SDK 1.5.0_04	
Solaris SPARC		Sun Java SDK 1.5.0_04

表 1-2 WebLogic インストールメディアの要件

	バイナリインストーラ	JAR インストーラ
RedHat Linux	X	
SuSe Linux	X	
Solaris x86		X
Solaris SPARC	X	

インストールされるアプリケーションに応じて、構成には追加リソースが必要となる場合があります。BEA の WebLogic 要件については、Web ページ「[Supported Configurations for WebLogic Platform 9.1](http://e-docs.bea.com/platform/suppconfigs/configs91/91_over/) (http://e-docs.bea.com/platform/suppconfigs/configs91/91_over/)」を参照してください。

WebLogic 9 プラグインのリリースノート

この章では、WebLogic 9 プラグインの最新情報と既知の問題について説明します。この章では、次の内容について説明します。

- 15 ページの「インストール上の問題」
- 15 ページの「実行時の問題」

インストール上の問題

インストールに関する問題はありません。

実行時の問題

ここでは、判明している WebLogic 9 プラグインの実行時の問題について説明します。

既存の JMS Queues、Connection Factories、および Topics のデフォルトインストールで、管理コンソールの状態が有効のままになる場合がある (6418393)

JMS Queues、Connection Factories、および Topics を、`install: default` コンポーネントを使用してインストールする場合、管理コンソールの状態が有効のままになる場合があります。この問題は、次の状況で発生する可能性があります。

- Sun N1 SPS ソフトウェアの外部で JMS Queue、Connection Factory、または Topic コンポーネントを作成し、このコンポーネントをターゲットホストにインストールしている。

- Sun N1 SPS ソフトウェアを使用して JMS Queue、Connection Factory、または Topic コンポーネントを作成し、そのコンポーネント名に、Sun N1 SPS ソフトウェアの外部で作成されたコンポーネントと同じ名前を割り当てている。
- SPS コンポーネント以外のコンポーネントを含むターゲットホストに、`install: default` を使用して Sun N1 SPS コンポーネントをインストールしていて、ターゲットホストにその Sun N1 SPS コンポーネントと同じ名前を持つ SPS コンポーネント以外のコンポーネントがある。

N1 SPS 環境へのコンポーネントにインストールには成功しますが、ドメインの状態は有効のままです。

回避策: 次に示す回避方法のどれか 1 つを選択してください。

- この問題を避けるために、コンポーネントのインストールに、`install: markOnly` コンポーネントプロシージャを選択します。

JMS 構成コンポーネントのインストール方法に関する詳細は、[89 ページの「構成サービスのインストール」](#)を参照してください。

- この問題が発生した場合は、WebLogic 9 グラフィカルユーザーインターフェイスで失敗したドメインへの変更を元に戻し、ドメインおよび管理サーバーに対して、`domainUtil` コンポーネントプロシージャを使用します。

`domainUtil` コンポーネントプロシージャの使用方法については、[104 ページの「ドメインおよび管理サーバーに対する変更を管理する」](#)を参照してください。

WebLogic 9 プラグインのインストールと構成

この章では、WebLogic 9 プラグインをインストールして構成する方法について説明します。この章では、次の内容について説明します。

- 17 ページの「WebLogic 9 プラグインの入手」
- 19 ページの「Sun N1 Service Provisioning System への WebLogic 9 プラグインの追加」
- 24 ページの「WebLogic 9 プラグインへのパッチの適用」

WebLogic 9 プラグインの入手

BEA WebLogic 9 プラグインを入手する手順は 2 段階に分かれます。はじめに BEA WebLogic 9 プラグイン JAR ファイルが含まれたパッケージファイルをシステムに追加する必要があります。そのあとに BEA WebLogic 9 プラグイン JAR ファイルをインポートします。

BEA WebLogic 9 プラグインは、Sun N1 Service Provisioning System ソフトウェアに対するプラグインとしてパッケージ化されています。BEA WebLogic 9 プラグイン用のプラグインファイルは、Sun N1 Service Provisioning System DVD または Sun Download Center から入手できます。

パッケージファイルをプラグインに追加すると、WebLogic 9 プラグインを `com.sun.weblogic9_1.0.jar` ファイルからインポートできます。

1. JAR ファイルを含むファイルを追加します。
 - 18 ページの「Solaris への WebLogic 9 プラグインの追加」
 - 18 ページの「Linux への WebLogic 9 プラグインの追加」
 - 18 ページの「Windows への WebLogic 9 プラグインの追加」
2. JAR ファイルをインポートします。- 19 ページの「Sun N1 Service Provisioning System への WebLogic 9 プラグインの追加」

Solaris への WebLogic 9 プラグインの追加

BEA WebLogic 9 プラグインは、SUNWspswl9 パッケージに含まれています。

▼ Solaris 用の WebLogic 9 プラグインパッケージを追加する

- 1 端末ウィンドウで、スーパーユーザーになります。
- 2 プラグインパッケージを含むディレクトリに移動します。
- 3 次のコマンドを入力し、Return キーを押します。

```
# pkgadd -d package_directory SUNWspswl9
```

スタンドアロン用 JAR ファイルは /opt/SUNWn1sps/plugins/com.sun.weblogic9/ ディレクトリにあります。

Linux への WebLogic 9 プラグインの追加

BEA WebLogic 9 プラグインは、sun-spswl9-1.0-1.noarch.rpm ファイルに含まれています。

▼ Linux 用の WebLogic 9 プラグインパッケージを追加する

- 1 端末ウィンドウで、スーパーユーザーになります。
- 2 sun-spswl9-1.0-1.noarch.rpm ファイルを含むディレクトリに移動します。
- 3 次のコマンドを入力し、Return キーを押します。

```
# rpm -i package_directory sun-spswl9-1.0-1.noarch.rpm
```

スタンドアロン用 JAR ファイルは /opt/SUNWn1sps/plugins/com.sun.weblogic9/ ディレクトリにあります。

Windows への WebLogic 9 プラグインの追加

BEA WebLogic 9 プラグインは、Microsoft Installer (MSI) パッケージファイル sun-spswl9-1.0.msi に含まれています。

▼ Windows 用の WebLogic 9 プラグイン MSI ファイルを追加する

- 1 sun-spswl9-1.0.msi ファイルを含むディレクトリに移動します。
- 2 sun-spswl9-1.0.msi ファイルをダブルクリックします。
インストーラの GUI が起動されます。JAR ファイルは、c:\Program Files\N1 Service Provisioning System\plugins\com.sun.weblogic9 ディレクトリにコピーされます。

Sun N1 Service Provisioning System への WebLogic 9 プラグインの追加

ある特定のプラグインを Sun N1 Service Provisioning System 製品に認識させるには、そのプラグインをマスターサーバーにインポートする必要があります。プラグインをインポートするには、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 システム管理者ガイド』の第 5 章「プラグインの管理」で詳しく説明されている手順に従います。

▼ ブラウザインタフェースを使用して WebLogic 9 プラグインをインポートする

プラグインをインポートまたはアップグレードするには、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 システム管理者ガイド』の第 5 章「プラグインの管理」で詳しく説明されている手順に従います。

- 1 ブラウザインタフェースのメインウィンドウの「Administrative」セクションで、「Plug-ins」をクリックします。
- 2 「Plug-ins」ページの「Action」列で、「Import」をクリックします。
- 3 com.sun.weblogic9_1.0.jar JAR ファイルの場所を参照します。
- 4 「Continue to Import」ボタンをクリックします。
インポートが正常に終了すると、プラグインの詳細ページが開いて、そのプラグインが提供するオブジェクトが表示されます。

▼ CLI を使用して WebLogic 9 プラグインをインポートする

コマンド行を使用して、プラグインをインポートすることもできます。

- ▶ CLI からプラグインファイルをインポートするには、次のように入力します。

```
% cr_cli -cmd plg.p.add -path plugin-filename -u username -p password
```

plugin-filename は、com.sun.weblogic9_1.0.jar です。

▼ WebLogic ソフトウェアをインストールする

WebLogic ドメイン、管理サーバーまたは管理対象サーバーを作成する前に、WebLogic ソフトウェアをインストールする必要があります。WebLogic ソフトウェアをインストールするには、ソフトウェアインストールを表す仮想ホストが作成されます。この仮想ホストは、後に WebLogic 管理サーバー、WebLogic マシン、および管理対象サーバーのターゲットホストとして使用します。

管理対象サーバーと管理サーバーは同じ Install コンポーネントを使用します。このコンポーネントがリモートエージェントに WebLogic 9 ソフトウェアをインストールします。リモートエージェントに Install コンポーネントをインストールしたあとは、そのコンポーネントを再インストールする必要はありません。

この手順で WebLogic ソフトウェアをインストールしたり、「markOnly」オプションを選択することでプロビジョニングシステム内部で既存のソフトウェアを登録することができます。

始める前に 手順の概要を確認します。

- 1 すべてのホストを準備します。

WebLogic 9 プラグインには、プロビジョニングシステム内のすべてのホストに配布する必要がある新しいシステムサービスが含まれています。『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 システム管理者ガイド』の「物理ホストの準備」を参照してください。

- 2 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで「WebLogic 9」をクリックします。

- 3 「WebLogic Software Installation: Install」リンクをクリックします。プランの「Details」ページが表示されます。

- 4 「Run」をクリックします。「Run」ページが表示されます。

- 5 「Plan Parameters」領域で、配備する Install コンポーネントの変数設定を選択します。
- このコンポーネントに対して変数設定が指定されている場合、メニューから適切な設定を選択します。
 - メニューから設定が使用できない場合は、「Select From List」をクリックします。
「Select Variable Settings From List」ウィンドウが表示されます。

- 変数設定の新しいセットを作成するには、「Create Set」を選択します。
次のリストに、Install コンポーネントの変数のうち、更新する可能性が高い変数を示します。

変数セット名	必須。ユーザーが作成する新しい変数設定セットの名前
beaHome	必須。WebLogic BEAHOME のディレクトリ。beaHome のデフォルト値は /usr/local/bea です。1 台のマシンに複数の WebLogic ソフトウェアをインストールする場合は、この値を更新する必要があります。

注- このディレクトリまたはリンクはすでに存在しているか、weblogicUser によって作成可能である必要があります。ディレクトリまたはリンクが存在している場合、weblogicUser にはディレクトリへの書き込みアクセス権が必要です。

sourceImage	すべての markOnly 以外のインストールで必須。WebLogic バイナリパッケージインストーラまたは JAR ファイルへの絶対パス。
sdkJavaHome	JAR ファイルインストーラで必須。SDK バージョン 1.5.0_04 用 JAVA_HOME 変数値、または互換バージョンを指定します。 バイナリインストーラを使用する場合は、この値は空白のままにします。
altTempDir	任意。インストールイメージを展開するための代替ディレクトリ。デフォルト値は /var/tmp ディレクトリです。/var/tmp/ ディレクトリに 1G バイトの使用可能な容量が含まれていない場合、altTempDir を別のディレクトリに設定します。
wlHomeDir	任意。WebLogic ソフトウェアインストールの場所です。デフォルト値は、WebLogic BEAHOME ディレクトリのサブディレクトリ weblogic91 です。WebLogic ソフトウェアのマルチインスタンスを実行する場合にこの変数の値を指定します。

webLogicUser	必須。WebLogic インストールを実行する UNIX ユーザー。このユーザーはインストール先ホストに存在し、beaHome ディレクトリの書き込みアクセス権を有する必要があります。新しいユーザーを作成しない場合は、このデフォルト値を weblogic から root に変更できます。
targetRefName	必須。このインストールの一意の仮想ホスト名。この値はドメインと管理対象サーバーの作成時にターゲットホストとして使用されます。WebLogic のインストールごとに、この変数に一意の値を指定する必要があります。
<hr/> <p>注 - 同じマシンで WebLogic ソフトウェアを複数回インストールする場合、この変数を新しい値に変更する必要があります。beaHome も、インストールごとに異なる必要があります。</p> <hr/>	
installNodeManagerService	任意。ターゲットホストで WebLogic Node Manager サービスを有効にします。Node Manager サービスを使用すると、管理対象サーバーの起動と停止処理を、ターゲットホストで遠隔制御できます。デフォルト値は no です。
installPath	必須。WebLogic ソフトウェアをインストールする場所を指定します。デフォルト値は、beaHome 変数の値です。
componentPaths	任意。インストールする WebLogic コンポーネントを設定。WebLogic 9 プラグインは、WebLogic Server のインストールと構成だけをサポートしています。 デフォルトでは、WebLogic ドメインおよびアプリケーションサーバーの実行に必要なソフトウェアがインストールされます。追加コンポーネントを選択した場合、より多くの容量 (350M バイトより大きい値) が必要になります。
weblogicTmpDir	必須。ターゲットホスト上の一時的なインストールファイルの場所を指定します。デフォルト値は、ターゲットホストの一時ディレクトリ (例: tmp、Temp など) のサブディレクトリ weblogic9 です。

installName	任意。実行するインストールタイプ(サイレント、または対話形式)を指定できます。デフォルト値は、silent.xml ファイルで、サイレントインストールを有効にします。
installHostName	WebLogic ソフトウェアをインストールするターゲットホストの名前を指定します。

- a. 表の最上部のテキストフィールドに、新しい変数設定セットの名前を入力します。
- b. **WebLogic** のインストール先のパスを変更するには、installPath 行を選択して正しいパスを入力します。

installPath 変数、beaHome 変数、および WebLogic BEAHome of installation プラン変数には、同じ値を格納する必要があります。

この3つの変数のデフォルト値は /usr/local/bea です。

注 - installPath 変数の値は、/opt などの絶対パスを指定しないかぎり、デフォルトのリモートエージェントディレクトリの相対パスとして扱われます。たとえば、Solaris リモートエージェントでは、installPath 変数を opt に設定し、デフォルトのホームディレクトリ /opt/SUNWn1sps/agent でエージェントにファイルを配備すると、ファイルは、/opt/SUNWn1sps/agent/opt/ に配備されます。

- c. **WebLogic** インストーラの場所を変更するには、sourceImage 行を選択して新しい場所を入力します。
 - d. 追加の **WebLogic** コンポーネントをこのインストールに含めるには、componentPaths 行を選択して追加コンポーネントを入力します。
追加コンポーネントは、パイプで区切られたリストで指定できます。たとえば WebLogic Server|WebLogic Workshop|WebLogic Integration|WebLogic Portal のように指定します。
 - e. 「Save」をクリックします。
新しい変数設定が表に追加されます。
 - f. 「Select」をクリックします。
- 別のコンポーネントから変数コンポーネントを使用するには、「Import Set」をクリックします。
変数セットのインポートの詳細については、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 オペレーションとプロビジョニングガイド』の「プランを実行する」を参照してください。

- 6 ターゲットホストを選択します。
管理サーバーまたは管理対象サーバーとして使用するリモートエージェント上で WebLogic ソフトウェアをインストールします。
- 7 プロビジョニングシステム内の既存の **WebLogic** ドメインを取得する場合は、「markOnly」オプションを選択します。
installPath、weblogicUser、および sdkJavaHome 変数値は、既存のドメインのこれら変数値と一致するようにしてください。
- 8 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

WebLogic 9 プラグインへのパッチの適用

WebLogic 9 プラグインに適用可能なパッチは、SunSolve (<http://sunsolve.sun.com>) サイトを確認します。パッチを適用するには、パッチの README ファイルの手順に従います。

WebLogic 9 プラグイン用の環境設定

WebLogic 9 プラグインでは、BEA WebLogic 9 アプリケーションの操作に役立つ機能に簡単にアクセスできます。この章では、次の内容について説明します。

- 25 ページの「Sun N1 Service Provisioning System を使用した WebLogic 9 環境のインストール方法および使用方法」
- 28 ページの「WebLogic インフラストラクチャーの作成」
- 49 ページの「WebLogic ドメイン、サーバー、およびクラスタの管理」

Sun N1 Service Provisioning System を使用した WebLogic 9 環境のインストール方法および使用方法

プラグインの規定

プロビジョニングシステムを使用すると、アプリケーションのプロビジョニングと管理を行うことができます。

プランとコンポーネントプロシージャ

WebLogic 9 プラグインは、タスクを実行するためのツールとしてプランとコンポーネントプロシージャの両方を提供します。プランを使用することで、目的の機能に直接リンクすることができます。コンポーネントプロシージャを使用することで、実行できるタスクの数がさらに多くなります。

タスク名

WebLogic 9 プラグインでは、タスクをアプリケーションタスク、インフラストラクチャータスク、および構成タスクの 3 つのカテゴリに分類しています。これらのタスクカテゴリは、実行する必要があるタスクを記述する際に同じ規則に従います。

表 4-1 共通のタスク名

タスク名	説明
View Installations、 View Configurations、 View Clusters、 View Cluster Members	特定のタイプのすべてのコンポーネントがインストールされている場所のリストを表示します。
View All	すべてのフォルダ内の特定のタイプのすべてのコンポーネントを表示します。
Create	このタイプの新しいコンポーネントをプロビジョニングシステムに追加できる「component Details」 ページへのリンクです。既存の WebLogic Admin Server からインポートすることで、またはファイルシステムをブラウズすることで、新しいコンポーネントを作成できます。 注 - WebLogic Admin Server 上では、アプリケーションタイプを参照できません。
Start または Stop	Start または Stop コンポーネントプロシージャを実行する自動生成されたプランへのリンク。 これらのプロシージャは、コンポーネントから直接実行することもできます。
Install、 Uninstall、 Remove、 Join、 Leave	記述された機能を作成するプランを表します。

グローバルな必要条件

本書で説明されている各タスクに関しては、2つの必要条件が存在します。

- WebLogic 管理サーバーは、数多くの処理の実行または確認に使用されます。したがって、WebLogic 9 環境を変更するタスクを実行するには、プロビジョニングシステム内で管理サーバーを正しい接続情報で構成して実行する必要があります。

注 - WebLogic ソフトウェアのインストール時、WebLogic Domain の作成時、またはエンタープライズアプリケーション (EAR)、Web アプリケーション (WAR)、および Java アーカイブ (JAR) ファイルの作成時には、管理サーバーはオンラインである必要はありません。

- プロビジョニングシステム内のすべてのタスクでは、ユーザーが特定のアクセス権を持っていることが必要になります。WebLogic プラグインを使用してタスクを実行するには、ユーザーは、コンポーネントが含まれるフォルダ上の Run Component Procedures アクセス権を有するユーザーグループに属する必要があります。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、Allow on Host Set アクセス権も必要です。

アクセス権の詳細については、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 システム管理者ガイド』の第3章「アクセス許可を使用したアクセスの制御」を参照してください。

グループメンバーシップの更新方法については、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 システム管理者ガイド』の「ユーザーのグループメンバーシップを変更する」を参照してください。

処理の概要

プロビジョニングシステム内に WebLogic 9 環境を作成する作業は、プロビジョニングシステムを使用せずに環境を作成する処理に似ています。

1. WebLogic 9 プラグインをインポートします。
『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 システム管理者ガイド』の「プラグインのインポート」を参照してください。
2. WebLogic セッション変数 WL_DEFAULT_PASSWORD および WL_DEFAULT_USER を設定します。
『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 プランとコンポーネントの開発者ガイド』の第 5 章「セッション変数」を参照してください。
3. すべてのホストを準備します。
WebLogic 9 プラグインには、プロビジョニングシステム内のすべてのホストに配布する必要がある新しいシステムサービスが含まれています。『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 システム管理者ガイド』の「物理ホストの準備」を参照してください。
4. WebLogic ソフトウェアをインストールします。
20 ページの「WebLogic ソフトウェアをインストールする」を参照してください。
5. Administrative Server をインストールすることで WebLogic ドメインを作成します。
28 ページの「WebLogic 9 ドメインと管理サーバーを作成する」を参照してください。
6. (任意) Node Manager マシンを作成します。
42 ページの「WebLogic マシンを作成する」を参照してください。
7. 新しい WebLogic ドメインで管理対象サーバーを作成します。
33 ページの「WebLogic 管理対象サーバーを作成する」を参照してください。
8. (任意) WebLogic 9 クラスタを作成します。
38 ページの「WebLogic クラスタを作成する」を参照してください。
9. (任意) 既存の管理対象サーバーをクラスタに割り当てることにより、クラスタメンバーを追加します。
41 ページの「クラスタメンバーを作成する」を参照してください。
10. 必要に応じて、データベースへのアプリケーションの接続を構成します。
アプリケーションによっては、データベース接続プールおよびデータベースデータソースを構成する必要がある場合があります。86 ページの「構成サービスの作成」を参照してください。
11. アプリケーションが Java Messaging Service を使用している場合、JMS サーバーを構成します。

86 ページの「構成サービスの作成」を参照してください。

12. ファイルシステムからアプリケーションアーカイブファイルを取得します。

61 ページの「WebLogic アプリケーションの取得と編集」を参照してください。

13. ターゲットホスト、ホストセット、またはクラスタにアプリケーションを配備します。

アプリケーションは、クラスタまたは管理対象サーバーのいずれかをターゲットとすることができます。

69 ページの「WebLogic アプリケーションの配備」を参照してください。

WebLogic インフラストラクチャーの作成

「WebLogic 9 Common Tasks」ページを起点として、WebLogic サーバーおよびクラスタの作成と管理を行います。

WebLogic 9 ドメインおよび管理サーバーの作成

▼ WebLogic 9 ドメインと管理サーバーを作成する

アプリケーションをホストする管理対象サーバーを設定する前に、ドメインおよび管理サーバーを作成する必要があります。ドメインは、管理サーバーにより管理される一連の WebLogic サーバーです。ドメインに関するすべての情報は、管理サーバー上に格納される構成ファイルに含まれています。

AdminServer コンポーネントをインストールすることによって新しいドメインを作成する場合は、次の作業も行います。

- ドメインの構成。
- Admin Server の仮想ホストの作成。この作業は、プランの実行時に実行されます。

この手順で新しいドメインを作成したり、また「markOnly」オプションを選択することでプロビジョニングシステム内で既存のドメインを登録することもできます。

注 - 本書では、AdminServer と管理サーバーという類似した用語を使用します。事前にパッケージされた Sun N1 Service Provisioning System WebLogic 9 コンポーネントは、AdminServer コンポーネントと呼ばれます。AdminServer はプロビジョニングシステムコンポーネントを表し、管理サーバーは WebLogic 9 環境上で動作するインストール済みアプリケーションを表します。

始める前に WebLogic 9 ドメインを作成するには、ユーザーは、コンポーネントが含まれるフォルダ上の Run Component Procedures アクセス権を有するユーザーグループに属する必要があります。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、Allow on Host Set アクセス権も必要です。

- 1 **WebLogic** セッション変数 `WL_DEFAULT_USER` および `WL_DEFAULT_PASSWORD` が設定されていることを確認します。
WebLogic セッション変数は、長さが7文字である必要があります。 `WL_DEFAULT_PASSWORD` 変数には数字を含めなければなりません。
セッション変数の詳細については、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 プランとコンポーネントの開発者ガイド』の第5章「セッション変数」を参照してください。
- 2 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 3 「**Domain Management: Create**」リンクをクリックします。
プランの「**Details**」ページが表示されます。
- 4 「**Run**」をクリックします。
「**Run**」ページが表示されます。
- 5 「**Plan Parameters**」領域で、配備する AdminServer コンポーネントの変数設定を選択します。
 - このコンポーネントに対して変数設定が指定されている場合、メニューから適切な設定を選択します。
 - メニューから設定が使用できない場合は、「**Select From List**」をクリックします。
「**Select Variable Settings From List**」ウィンドウが表示されます。
 - 変数設定の新しいセットを作成するには、「**Create Set**」を選択します。
次のリストに、AdminServer コンポーネントの変数のうち、更新する可能性が高い変数を示します。

注 - ポート値を指定するこれらの変数では、`weblogicUser` 変数の値が `root` でない場合、使用可能なポートを指定してください。

<code>domainName</code>	必須。WebLogic のドメイン名です。
<code>adminListenPort</code>	必須。管理サーバーが SSL 以外の通信で待機するデフォルトの TCP ポート (1024 から 65534)。デフォルト値は 7001 です。
<code>adminSslListenPort</code>	管理サーバーが SSL 通信で待機するデフォルトの TCP ポート (1024 から 65534)。デフォルト値は 7002 です。
<code>administrationPort</code>	管理サーバーがすべての接続に使用するデフォルトの TCP ポート (1 から 65534)。この変数を設定する

と、これ以外のポートはすべて使用できなくなります。デフォルト値は **9002** です。

enableAdministrationPort

administrationPort 変数で指定したドメインの広域管理ポートを有効にします。この値を **true** に設定すると、**administrationPort** 変数で指定したポートで管理サーバーが通信を待機します。

この値を **true** に設定する場合は、**secureConnect** 値を **true** に設定します。すべての通信トラフィックでこのポートが使用されます。

デフォルト値は **false** です。

adminPort

必須。使用する JMX 呼び出しおよび管理対象サーバー用のデフォルトのポート。この値は、**:[adminListenPort]**、**:[adminSslListenPort]**、または **:[administrationPort]** のいずれかです。デフォルト値は、**:[adminSslListenPort]** です。

注- この変数を **:[adminSslListenPort]** に設定する場合は、**secureConnect** 変数を **true** に設定してください。この変数を **:[administrationPort]** に設定する場合は、**secureConnect** 変数および **enableAdministrationPort** 変数の両方を **true** に設定してください。

ドメインが作成される前に、ポートが使用可能であることを確認する検査が実行されます。

secureConnect

任意。True に設定すると、**adminPort** 変数で指定されたポートは接続に SSL を使用します。**adminSslListenPort** 変数または **administrationPort** 変数を使用している場合は、この値を **true** に設定してください。

production

必須。この変数は、管理対象サーバーを稼働モードで実行するかどうかを決定します。稼働モードのデフォルト値は **false** です。この変数は、**true** または **false** に設定できます。

更新される頻度が少ない変数には、次のような構成変数が含まれます。

adminManagedServer

必須。ドメイン管理コンソールをホストする管理対象サーバーの名前。デフォルト値は、**AdminServer** です。**markOnly** インストールを実行している場合は、この変数を、WebLogic インストール中に使用されるサーバー名に設定します。

adminHost 必須。管理対象サーバーが管理サーバーに接続するために使用するホスト名または IP アドレス。デフォルト値は、管理サーバーが常駐しているリモートエージェントのホスト名です。

注 - `secureConnect` を使用している場合は、SSL ホスト名の検証のために、この値をマシンのノード名に変更する必要があります。

targetRefName 必須。この変数は、ドメインの仮想ホストの名前になります。代入変数は、ホスト名とドメイン名の値に基づきます。この変数の形式は、
:`[target.sys.hostName]_weblogic_admin_:[domainName]` になります。たとえば、`sqa-420_weblogic_admin_wls`。

configJAR ドメインの構成に使用するドメインのテンプレート JAR を指定します。デフォルト値を使用してください。デフォルト値は、`:[wLHomeDir]:[/]common:[/]templates:[/]domains:[/]wls.jar` です。

「Select Variable Settings From List」 ウィンドウが表示されます。

- a. 表の最上部のテキストフィールドに、新しい変数設定セットの名前を入力します。
- b. **WebLogic** ドメイン名を変更するには、`domainName` 行を選択して新しいドメイン名を入力します。
- c. 適切な変数のフィールドに、使用するポート番号を指定します。
`adminListenPort`、`adminSslListenPort`、または `administrationPort` フィールドにポート値を指定します。
- d. `adminPort` 行を選択し、前の手順で設定した変数に適切な代替値を入力します。
この値には、`:[adminListenPort]`、`:[adminSslListenPort]`、または `:[administrationPort]` のいずれかを設定します。
- e. 管理サーバーへの接続に、セキュリティー保護された **HTTP** を使用するように指定するには、`secureConnect` 行を選択し、テキストフィールドに `True` と入力します。
`adminPort` 変数が、`:[adminSslListenPort]` または `:[administrationPort]` のいずれかに設定されている場合にこの値を設定します。
- f. **WebLogic** のインストール先のパスを変更するには、`beaHome` 行を選択して正しいパスを入力します。

注 - installPath 変数の値は、/opt などの絶対パスを指定しないかぎり、デフォルトのリモートエージェントディレクトリの相対パスとして扱われます。たとえば、Solaris リモートエージェントでは、installPath 変数を opt に設定し、デフォルトのホームディレクトリ /opt/SUNWn1sps/agent でエージェントにファイルを配備すると、ファイルは、/opt/SUNWn1sps/agent/opt/ に配備されます。

- g. 必要に応じて、そのほかの定義済み変数の値も修正します。

targetRefName は使用環境に合わせて事前定義されていますが、必要であれば修正できます。targetRefName は、ホスト名の値とドメイン名の値に基づいて作成されます。この変数の形式は、
: [target:sys.hostName]_admin_: [domainName] になります。

- 別のコンポーネントの変数設定を使用する場合は、「**Import Set From Component**」をクリックします。

「Import Variable Settings」ウィンドウが表示されます。

- a. 必要に応じて、インポートする変数設定を持つコンポーネントがあるフォルダにナビゲートします。
- b. コンポーネントのバージョンを選択します。

注 - コンポーネントのバージョンが異なると、変数設定も異なる可能性があります。現在のコンポーネントおよびインポートする変数設定があるコンポーネントは、必ず共通の変数を共有するようにしてください。変数設定のインポート元のコンポーネントと、プランで使用するコンポーネントの間で共通に使用している変数が存在しない場合、変数設定はインポートされません。

- c. 「**Import Variable Settings**」をクリックします。

変数設定がインポートされ、表形式で表示されます。

- d. 「**Plan Details Run**」ページの「**Variable Settings**」ドロップダウンリストから、インポートした変数設定を選択し、「**Select**」をクリックします。

- ファイルに保存されているコンポーネント変数設定を使用する場合は、次の手順に従います。

- a. 「**Import Sets from File**」テキストフィールドに、使用する変数設定ファイルへのパスを入力します。

ファイルシステムをブラウズして適切なファイルを探すには、「**Browse**」ボタンをクリックします。

- b. 「Import」をクリックします。

変数設定がインポートされ、表形式で表示されます。

注-変数設定のインポート元のファイルと、プランで使用するコンポーネントの間で共通に使用している変数が存在しない場合、変数設定はインポートされません。

- c. 「Plan Details Run」ページの「Variable Settings」ドロップダウンリストから、インポートした変数設定を選択し、「Select」をクリックします。

- 6 ターゲットホストを選択します。

WebLogic ソフトウェアをインストールしたときに作成された仮想ホストをターゲットとします。20 ページの「WebLogic ソフトウェアをインストールする」の手順を参照してください。

注-ターゲットホストは、com.sun.weblogic9#InstallHS ホストセットのメンバーである必要があります。

- 7 プロビジョニングシステム内の既存の WebLogic ドメインを取得する場合は、「markOnly」オプションを選択します。

このコンポーネントに指定する変数値は、必ずインストールされている WebLogic ドメインの構成とすべて一致させてください。

- 8 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

管理対象サーバーの作成

各ドメインで複数の管理対象サーバーを実行し、アプリケーションをホストすることができます。WebLogic 管理対象サーバーは Server コンポーネントによりインストールされ、プロビジョニングシステム内に表示されます。本書全体を通じて、「Server」はプロビジョニングシステムコンポーネントを指しますが、「管理対象サーバー」は WebLogic 9 環境で動作する管理対象サーバーのインストール済みインスタンスを指します。

管理対象サーバーが、システムを遠隔から管理する WebLogic Node Manager プロセスを使用できるようにすることもできます。管理対象サーバーで Node Manager を使用できるようにするには、管理対象サーバーに WebLogic マシンを作成する必要があります。

▼ WebLogic 管理対象サーバーを作成する

この手順で新しい管理対象サーバーを作成したり、また「markOnly」オプションを選択することでプロビジョニングシステム内で既存の管理対象サーバーを登録することもできます。

始める前に WebLogic 管理対象サーバーを作成する前に、次の条件が満たされている必要があります。

- 管理対象サーバーを含むドメインが存在する必要がある。
詳細は、28 ページの「WebLogic 9 ドメインと管理サーバーを作成する」を参照してください。
- ドメインの AdminServer が実行中である必要がある。
AdminServer を手動で起動するには、AdminServer の「component Details」ページから startAdminServer コンポーネントプロシージャを実行します。
- WebLogic ソフトウェアが、管理対象サーバーのインストール先ホストにインストールされている必要がある。
20 ページの「WebLogic ソフトウェアをインストールする」を参照してください。
- ユーザーは、コンポーネントを含むフォルダ上に Run Component Procedures アクセス権を有するユーザーグループに属する必要がある。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、Allow on Host Set アクセス権も必要です。
- (任意) Node Manager で管理対象サーバーを遠隔から管理する場合は、WebLogic マシンを作成する必要がある。そのあと、ドメインに WebLogic マシンを登録し、Node Manager を起動します。
42 ページの「WebLogic マシンを作成する」を参照してください。

- 1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで「WebLogic 9」をクリックします。
- 2 「Application Server Management: Create」リンクをクリックします。
プランの「Details」ページが表示されます。
- 3 「Run」をクリックします。
「Run」ページが表示されます。
- 4 「Plan Parameters」領域で、配備する ManagedServer コンポーネントの変数設定を選択します。
Server コンポーネントは、WebLogic 9 環境内の管理対象サーバーインスタンスを表します。
 - このコンポーネントに対して変数設定が指定されている場合、メニューから適切な設定を選択します。

- メニューから設定が使用できない場合は、「**Select From List**」をクリックします。
「Select Variable Settings From List」ウィンドウが表示されます。
 - 変数設定の新しいセットを作成するには、「**Create Set**」を選択します。
次のリストに、ManagedServer コンポーネントの変数のうち、更新する可能性が高い変数を示します。
- | | |
|---------------------|--|
| 変数セット名 | 必須。ユーザーが作成する新しい変数設定セットの名前 |
| adminServerHostName | 必須。新しい管理対象サーバーをホストする AdminServer 仮想ホストの名前。この値の形式は、
<i>remoteAgentName_weblogic_admin_domainName</i> です。

仮想ホストは「Hosts」ページにあります。仮想ホストのタイプは、 <i>com.sun.weblogic9#AdminServerHS</i> です。 |
| targetName | 必須。新しい管理対象サーバーの名前。この名前は、管理対象サーバー仮想ホストを作成するため targetRefName 変数で使用されます。 |
| startupScriptName | 必須。管理対象サーバーの起動スクリプトの名前。 |
| serverPort | 必須。この変数のデフォルト値は 7010 です。このポートが使用できない場合、プランは失敗し、警告が表示されます。 |
| serverSslPort | 必須。この変数のデフォルト値は 7020 です。このポートが使用できない場合、プランは失敗し、警告が表示されます。 |
| listenAddress | 必須。管理対象サーバーが待機に使用する IP アドレス。 |
| useNodeManager | 必須。遠隔から管理対象サーバーを管理するために WebLogic マシンを使用するかどうかを指定します (true または false)。デフォルト値は false です。遠隔から管理対象サーバーを管理するために WebLogic マシンを使用している場合は、この値を true に設定します。 |
| adminPortOverride | 管理サーバーとの通信に使用する TCP ポートを指定します。

管理対象サーバーが、管理サーバーと同じシステムで実行されている場合は、管理サーバーが管理ポート用に使用しているポートと衝突しないようにこの変数のデフォルト値を変更します。

この変数の値を変更すると、すべての接続にこのポートが使用され、管理サーバーの <i>administrationPort</i> 変数で指定された値よりも優先します。デフォルト値は 9002 です。 |

webLogicUser	必須。WebLogic インストールを実行する UNIX ユーザー。このユーザーはインストール先ホストに存在し、beaHome ディレクトリの書き込みアクセス権を有する必要があります。この変数のデフォルト値は、WebLogic ソフトウェアのインストールコンポーネントから取得されません。
production	必須。この変数は、管理対象サーバーを稼働モードで実行するかどうかを決定します。稼働モードのデフォルト値は false です。この変数は、true または false に設定できます。
serverRoot	必須。管理対象サーバー用に使用されるディレクトリ。 管理対象サーバーの管理に WebLogic マシンを使用している場合は、この値を、Node Manager サーバーのルートディレクトリを示す : <code>[wlHomeDir]:[/]common:[/]nodemanager</code> : <code>[/]:[domainName]:[/]servers:[/]:[targetName]</code> に設定します。

- 別のコンポーネントの変数設定を使用する場合は、「**Import Set From Component**」をクリックします。
「**Import Variable Settings**」ウィンドウが表示されます。
 - a. 必要に応じて、インポートする変数設定を持つコンポーネントがあるフォルダにナビゲートします。
 - b. コンポーネントのバージョンを選択します。

注-コンポーネントのバージョンが異なると、変数設定も異なる可能性があります。現在のコンポーネントおよびインポートする変数設定があるコンポーネントは、必ず共通の変数を共有するようにしてください。変数設定のインポート元のコンポーネントと、プランで使用するコンポーネントの間で共通に使用している変数が存在しない場合、変数設定はインポートされません。

- c. 「**Import Variable Settings**」をクリックします。
変数設定がインポートされ、表形式で表示されます。
- d. 「**Plan Details Run**」ページの「**Variable Settings**」ドロップダウンリストから、インポートした変数設定を選択し、「**Select**」をクリックします。

- ファイルに保存されているコンポーネント変数設定を使用する場合は、次の手順に従います。
 - a. 「**Import Sets from File**」テキストフィールドに、使用する変数設定ファイルへのパスを入力します。
ファイルシステムをブラウズして適切なファイルを探すには、「**Browse**」ボタンをクリックします。
 - b. 「**Import**」をクリックします。
変数設定がインポートされ、表形式で表示されます。

注-変数設定のインポート元のファイルと、プランで使用するコンポーネントの間で共通に使用している変数が存在しない場合、変数設定はインポートされません。

- c. 「**Plan Details Run**」ページの「**Variable Settings**」ドロップダウンリストから、インポートした変数設定を選択し、「**Select**」をクリックします。
- 5 ターゲットホストまたはターゲットホストセットを選択します。
管理対象サーバーはターゲットとするリモートエージェントに常駐します。

WebLogic ソフトウェアをインストールしたときに作成された仮想ホストをターゲットとします。20 ページの「[WebLogic ソフトウェアをインストールする](#)」の手順を参照してください。

注-ターゲットホストは、`com.sun.weblogic9#InstallHS` ホストセットのメンバーである必要があります。

- 6 プロビジョニングシステム内で既存の **WebLogic** 管理対象サーバーをモデル化している場合は、「**markOnly**」オプションを選択します。
コンポーネントに指定した変数が、必ず既存の管理対象サーバーの値と一致するようにしてください。
- 7 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

WebLogic クラスタの作成

次のような理由により、クラスタを作成しなければならない場合があります。

- サーバーのフェイルオーバー機能を使用してアプリケーションの可用性を高める
- 複数のサーバーでアプリケーションをスケーリングすることでスループットを高める

クライアントに対してはクラスタは1つのWebLogic管理対象サーバーインスタンスとして表示されます。クラスタを構成するサーバーインスタンスは、同一マシン上で実行したり、複数のマシンに配置することができます。クラスタ内の各クラスタメンバーは、同じバージョンのWebLogicを実行する必要があります。

▼ WebLogic クラスタを作成する

この手順で新しいクラスタを作成したり、また「markOnly」オプションを選択することでプロビジョニングシステム内で既存のクラスタを登録することもできます。

始める前に WebLogic クラスタを作成する前に、WebLogic ドメインおよび管理サーバーを作成する必要があります。

WebLogic クラスタを作成するには、ユーザーは、コンポーネントが含まれるフォルダ上の Run Component Procedures アクセス権を有するユーザーグループに属する必要があります。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、Allow on Host Set アクセス権も必要です。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**Cluster Management: Create**」リンクをクリックします。
プランの「**Details**」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
「**Run**」ページが表示されます。
- 4 「**Plan Parameters**」領域で、配備する **Cluster** コンポーネントの変数設定を選択します。
 - このコンポーネントに対して変数設定が指定されている場合、メニューから適切な設定を選択します。
 - メニューから設定が使用できない場合は、「**Select From List**」をクリックします。
「**Select Variable Settings From List**」ウィンドウが表示されます。
 - 変数設定の新しいセットを作成するには、「**Create Set**」を選択します。
次のリストに、ManagedServer コンポーネントの変数のうち、更新する可能性が高い変数を示します。

変数セット名	必須。ユーザーが作成する新しい変数設定セットの名前
targetName	必須。新しいクラスタの名前。

<code>clusterAddress</code>	任意。この変数には、複数の IP アドレスに対応する DNS ホスト名、またはシングルアドレスホスト名や IP アドレスのコンマ区切りリストを使用できます。この変数には値は必要ありません。
<code>multicastAddress</code>	この変数は、クラスタメンバーが相互通信に使用できるアドレスを提供します。
<code>multicastPort</code>	この変数は、クラスタメンバーが相互通信に使用できるポート番号を提供します。

「Select Variable Settings From List」ウィンドウが表示されます。

- a. 表の最上部のテキストフィールドに、新しい変数設定セットの名前を入力します。
- b. 新しいクラスタの名前を変更するには、`targetName` 行を選択して新しい名前を入力します。
- c. クラスタインスタンスのアドレスを指定するには、`clusterAddress` 行を選択してアドレスを入力します。
この変数には、複数の IP アドレスに対応する DNS ホスト名、またはシングルアドレスホスト名や IP アドレスのコンマ区切りリストを使用できます。この変数には値は必要ありません。
- d. クラスタのマルチキャストアドレスを変更するには、`multicastAddress` 行を選択して新しいアドレスを入力します。
この変数は、クラスタメンバーが相互通信に使用できるアドレスを提供します。デフォルト値は 237.0.0.1 です。
- e. クラスタのマルチキャストポートを変更するには、`multicastPort` 行を選択して新しいポート番号を入力します。
この変数は、クラスタメンバーが相互通信に使用できるポート番号を提供します。デフォルト値は 7001 です。
- f. 必要に応じて、そのほかの定義済み変数の値も修正します。
 - `installPath` は、`AdminServer` の仮想ホスト名、ドメイン名、およびクラスタ名に基づいて作成されます。
 - `targetRefName` は、ホスト名の値とドメイン名の値に基づいて作成されます。この変数の形式は、`:[target:sys.hostName]_admin_: [domainName]` です。
- g. 「Save」をクリックします。
新しい変数設定が表に追加されます。

h. 「**Select**」をクリックします。

- 別のコンポーネントの変数設定を使用する場合は、「**Import Set From Component**」をクリックします。

「**Import Variable Settings**」ウィンドウが表示されます。

- a. 必要に応じて、インポートする変数設定を持つコンポーネントがあるフォルダにナビゲートします。
- b. コンポーネントのバージョンを選択します。

注-コンポーネントのバージョンが異なると、変数設定も異なる可能性があります。現在のコンポーネントおよびインポートする変数設定があるコンポーネントは、必ず共通の変数を共有するようにしてください。変数設定のインポート元のコンポーネントと、プランで使用するコンポーネントの間で共通に使用している変数が存在しない場合、変数設定はインポートされません。

c. 「**Import Variable Settings**」をクリックします。

変数設定がインポートされ、表形式で表示されます。

d. 「**Plan Details Run**」ページの「**Variable Settings**」ドロップダウンリストから、インポートした変数設定を選択し、「**Select**」をクリックします。

- ファイルに保存されているコンポーネント変数設定を使用する場合は、次の手順に従います。

a. 「**Import Sets from File**」テキストフィールドに、使用する変数設定ファイルへのパスを入力します。

ファイルシステムをブラウズして適切なファイルを探すには、「**Browse**」ボタンをクリックします。

b. 「**Import**」をクリックします。

変数設定がインポートされ、表形式で表示されます。

注-変数設定のインポート元のファイルと、プランで使用するコンポーネントの間で共通に使用している変数が存在しない場合、変数設定はインポートされません。

c. 「**Plan Details Run**」ページの「**Variable Settings**」ドロップダウンリストから、インポートした変数設定を選択し、「**Select**」をクリックします。

- 5 ターゲットホストを選択します。
Administrative Server にはクラスタのみをインストールできるため、ターゲットホストは AdminServer 仮想ホストです。
- 6 プロビジョニングシステム内で既存の **WebLogic** クラスタを取得している場合は、「markOnly」オプションを選択します。
- 7 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

▼ クラスタメンバーを作成する

クラスタノードは、クラスタに割り当てられる管理対象サーバーです。アプリケーションの可用性とスケーラビリティを高めるために、クラスタメンバーを作成できません。

管理対象サーバーがクラスタに参加すると、現在管理対象サーバーがターゲットであるアプリケーションは引き続きそのサーバーをターゲットとし、アプリケーションの配備状態は保存されます。クラスタメンバーを作成するプランは、自動的に管理対象サーバーを停止し、それをクラスタに追加します。管理対象サーバーが追加されたあと、プランは管理対象サーバーを再起動します。

この手順で新しいクラスタメンバーを作成したり、また「markOnly」オプションを選択することでプロビジョニングシステム内で既存のクラスタメンバーを登録することもできます。

始める前に クラスタメンバーを作成する前に、次の条件が満たされている必要があります。

- クラスタメンバーに変換する管理対象サーバーが存在する必要がある。
詳細は、[33 ページの「WebLogic 管理対象サーバーを作成する」](#)を参照してください。
- ノードの追加先のクラスタが存在する必要がある。
詳細については、[38 ページの「WebLogic クラスタを作成する」](#)を参照してください。

クラスタメンバーを作成するには、ユーザーは、コンポーネントが含まれるフォルダ上の Run Component Procedures アクセス権を有するユーザーグループに属する必要があります。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、Allow on Host Set アクセス権も必要です。

- 1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで「WebLogic 9」をクリックします。
- 2 「Cluster Member Management: Join」リンクをクリックします。
プランの「Details」ページが表示されます。

- 3 「Run」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 4 クラスタに追加する管理対象サーバーを選択します。
 - 管理対象サーバーの名前を入力するか、リストから選択して、ターゲットホストを選択します。
 - メニューからターゲットホストセットを選択します。
- 5 プラン変数 **WebLogic Cluster Name** に正しいクラスタ名が含まれていることを確認します。
- 6 サーバーが再起動されたことを確認する前にプロビジョニングシステムが待機する期間を指定するには、「**Seconds to Wait Before Failing Verify Step**」フィールドに秒数を入力します。
- 7 プロビジョニングシステム内で既存の **WebLogic** クラスタメンバーを取得している場合は、「markOnly」オプションを選択します。
- 8 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

WebLogic マシンの作成

遠隔からの管理対象サーバーの管理に Node Manager プロセスを使用するように WebLogic マシンを設定できます。管理対象サーバーの制御に Node Manager プロセスを使用するには、WebLogic マシンコンポーネントをインストールしてドメインにマシンを登録する必要があります。

適切なプロシージャーを選択し、WebLogic マシンを作成します。

- 管理対象サーバーに Machine コンポーネントをインストールするには、[42 ページ](#)の「[WebLogic マシンを作成する](#)」を参照してください。
- N1 SPS 環境に既存の WebLogic マシンを組み込むには、[46 ページ](#)の「[N1 SPS 環境に既存の WebLogic マシンを組み込む](#)」を参照してください。

▼ WebLogic マシンを作成する

この手順は、WebLogic マシンコンポーネントをインストールし、Node Manager プロセスを起動する方法を説明しています。

N1 SPS 環境に既存の WebLogic マシンを組み込む場合は、[46 ページ](#)の「[N1 SPS 環境に既存の WebLogic マシンを組み込む](#)」を参照してください。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**WebLogic Machine Installation: Install**」リンクをクリックします。
プランの「**Details**」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
「**Run**」ページが表示されます。
- 4 「**Plan Parameters**」領域で、配備する Machine コンポーネントの変数設定を選択します。
Machine コンポーネントは、WebLogic 9 環境内のマシンインスタンスを表します。
 - このコンポーネントに対して変数設定が指定されている場合、メニューから適切な設定を選択します。
 - メニューから設定が使用できない場合は、「**Select From List**」をクリックします。
「**Select Variable Settings From List**」ウィンドウが表示されます。

- 変数設定の新しいセットを作成するには、「**Create Set**」を選択します。
次のリストに、Machine コンポーネントの変数のうち、更新する可能性が高い変数を示します。
- | | |
|--------------------------|---|
| 変数セット名 | 必須。ユーザーが作成する新しい変数設定セットの名前 |
| machineName | 必須。ドメインの Node Manager マシンの名前を指定します。デフォルト値は、ターゲットホストのホスト名です。 |
| nodeManagerPort | 必須。Node Manager が通信の待機に使用するポートを指定します。デフォルト値は 5556 です。 |
| nodeManagerListenAddress | 必須。Node Manager が待機に使用する IP アドレスを指定します。デフォルト値は、リモートエージェントの IP アドレスです。 |
| unixPlatform | 必須。作成するマシンタイプを指定します (true、false)。デフォルト値は true です。 |
| weblogicUser | 必須。Node Manager を実行する UNIX ユーザーです。このユーザーはインストール先ホストに存在し、 <code>beaHome</code> ディレクトリの書き込みアクセス権を有する必要があります。デフォルト値は、 <code>installall</code> コンポーネント用に設定される <code>weblogicUser</code> 変数の値です。 |

wlHomeDir	必須。WebLogic ソフトウェアインストールの場所を指定します。この変数は変更しないでください。
installPath	必須。マシンの一意のインストールパスを指定します。この変数は変更しないでください。

- 別のコンポーネントの変数設定を使用する場合は、「**Import Set From Component**」をクリックします。
「Import Variable Settings」ウィンドウが表示されます。
 - a. 必要に応じて、インポートする変数設定を持つコンポーネントがあるフォルダにナビゲートします。
 - b. コンポーネントのバージョンを選択します。

注-コンポーネントのバージョンが異なると、変数設定も異なる可能性があります。現在のコンポーネントおよびインポートする変数設定があるコンポーネントは、必ず共通の変数を共有するようにしてください。変数設定のインポート元のコンポーネントと、プランで使用するコンポーネントの間で共通に使用している変数が存在しない場合、変数設定はインポートされません。

- c. 「**Import Variable Settings**」をクリックします。
変数設定がインポートされ、表形式で表示されます。
 - d. 「**Plan Details Run**」ページの「**Variable Settings**」ドロップダウンリストから、インポートした変数設定を選択し、「**Select**」をクリックします。
- ファイルに保存されているコンポーネント変数設定を使用する場合は、次の手順に従います。
 - a. 「**Import Sets from File**」テキストフィールドに、使用する変数設定ファイルへのパスを入力します。
ファイルシステムをブラウズして適切なファイルを探すには、「**Browse**」ボタンをクリックします。
 - b. 「**Import**」をクリックします。
変数設定がインポートされ、表形式で表示されます。

注-変数設定のインポート元のファイルと、プランで使用するコンポーネントの間で共通に使用している変数が存在しない場合、変数設定はインポートされません。

- c. 「Plan Details Run」ページの「Variable Settings」ドロップダウンリストから、インポートした変数設定を選択し、「Select」をクリックします。

- 5 ターゲットホストまたはターゲットホストセットを選択します。
WebLogic マシンはターゲットとするリモートエージェントに常駐します。

注-ターゲットホストは、com.sun.weblogic#InstallHS ホストセットのメンバーである必要があります。

WebLogic ソフトウェアをインストールしたときに作成された仮想ホストをターゲットとします。20 ページの「WebLogic ソフトウェアをインストールする」の手順を参照してください。

- 6 インストールのあとで **Node Manager** を起動する場合は、「Start Node Manager」チェックボックスがチェックされていることを確認します。
- 7 (省略可能)インストール中に **WebLogic Server Scripting Tool (WLST)** に **Java** の引数を渡す場合は、「Java Arguments Used for weblogic.WLST」フィールドに引数を入力します。
管理サーバーのポートで SSL を使用していて、証明書の提示が必要な場合は、WLST の使用が必要となる場合があります。

WLST を使用して管理タスクと構成変更を行う方法の詳細は、BEA の WebLogic Server の [Using the WebLogic Server Scripting Tool \(http://dev.bea.com/codeLibrary/code/wlst.jsp\)](http://dev.bea.com/codeLibrary/code/wlst.jsp) を参照してください。
- 8 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。
プロビジョニングソフトウェアによって WebLogic マシンが作成されます。
- 9 WebLogic マシンが作成されたことを確認します。

- a. ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで、「WebLogic 9」をクリックします。
- b. 「WebLogic Machine Installation: View Installations」リンクをクリックします。
「Component Details Where Installed」ページが表示されます。「Hosts Where Installed」表に、作成した WebLogic マシン (拡張子 -machine が付く) が表示されます。

次の手順 WebLogic ドメインに、WebLogic マシンを登録します。手順については、48 ページの「ドメインに WebLogic マシンを登録する」を参照してください。

管理対象サーバーの管理に WebLogic マシンを使用するには、管理対象サーバーに Node Manager を使用する指示を行う必要があります。33 ページの「WebLogic 管理対象サーバーを作成する」を参照してください。

▼ N1 SPS 環境に既存の WebLogic マシンを組み込む

この手順は、プロビジョニングシステムに既存の WebLogic マシンを組み込む方法を説明しています。

新しい WebLogic マシンを作成する場合は、42 ページの「WebLogic マシンを作成する」を参照してください。

- 1 「ブラウザインタフェース」の「**Application Deployments**」セクションで、「**Components**」をクリックします。
「Components」ページが表示されます。
- 2 必要に応じて、「**Change Folder**」リンクをクリックして com/sun/weblogic9 フォルダにナビゲートします。
- 3 「**Components**」列で、「**Machine**」をクリックします。
「Components Details」ページが表示されます。
- 4 「**Component Procedures**」表で、「**install: markOnly**」行の「**Run**」リンクをクリックします。
「Plans Details Run」ページが表示されます。
- 5 「**Plan Parameters**」領域で、配備する Machine コンポーネントの変数設定を選択します。Machine コンポーネントは、WebLogic 9 環境内のマシンインスタンスを表します。
 - このコンポーネントに対して変数設定が指定されている場合、メニューから適切な設定を選択します。
 - メニューから設定が使用できない場合は、「**Select From List**」をクリックします。
「Select Variable Settings From List」ウィンドウが表示されます。
 - 変数設定の新しいセットを作成するには、「**Create Set**」を選択します。
次のリストに、Machine コンポーネントの変数のうち、更新する可能性が高い変数を示します。

変数セット名	必須。ユーザーが作成する新しい変数設定セットの名前
machineName	必須。ドメインの Node Manager マシンの名前を指定します。デフォルト値は、ターゲットホストのホスト名です。
nodeManagerPort	必須。Node Manager が通信の待機に使用するポートを指定します。デフォルト値は 5556 です。

nodeManagerListenAddress	必須。Node Manager が待機に使用する IP アドレスを指定します。
unixPlatform	必須。作成するマシンタイプを指定します (true、false)。デフォルト値は true です。
weblogicUser	必須。Node Manager を実行する UNIX ユーザーです。このユーザーはインストール先ホストに存在し、beaHome ディレクトリの書き込みアクセス権を有する必要があります。
wlHomeDir	必須。WebLogic ソフトウェアインストールの場所を指定します。
installPath	必須。マシンの一意のインストールパスを指定します。

- 別のコンポーネントの変数設定を使用する場合は、「**Import Set From Component**」をクリックします。
「**Import Variable Settings**」ウィンドウが表示されます。
 - a. 必要に応じて、インポートする変数設定を持つコンポーネントがあるフォルダにナビゲートします。
 - b. コンポーネントのバージョンを選択します。

注-コンポーネントのバージョンが異なると、変数設定も異なる可能性があります。現在のコンポーネントおよびインポートする変数設定があるコンポーネントは、必ず共通の変数を共有するようにしてください。変数設定のインポート元のコンポーネントと、プランで使用するコンポーネントの間で共通に使用している変数が存在しない場合、変数設定はインポートされません。

- c. 「**Import Variable Settings**」をクリックします。
変数設定がインポートされ、表形式で表示されます。
 - d. 「**Plan Details Run**」ページの「**Variable Settings**」ドロップダウンリストから、インポートした変数設定を選択し、「**Select**」をクリックします。
- ファイルに保存されているコンポーネント変数設定を使用する場合は、次の手順に従います。
 - a. 「**Import Sets from File**」テキストフィールドに、使用する変数設定ファイルへのパスを入力します。
ファイルシステムをブラウズして適切なファイルを探すには、「**Browse**」ボタンをクリックします。

- b. 「**Import**」をクリックします。
変数設定がインポートされ、表形式で表示されます。

注-変数設定のインポート元のファイルと、プランで使用するコンポーネントの間で共通に使用している変数が存在しない場合、変数設定はインポートされません。

- c. 「**Plan Details Run**」ページの「**Variable Settings**」ドロップダウンリストから、インポートした変数設定を選択し、「**Select**」をクリックします。
- 6 ターゲットホストまたはターゲットホストセットを選択します。
WebLogic マシンはターゲットとするリモートエージェントに常駐します。

注-ターゲットホストは、`com.sun.weblogic#InstallLHS` ホストセットのメンバーである必要があります。

WebLogic ソフトウェアをインストールしたときに作成された仮想ホストをターゲットとします。20 ページの「[WebLogic ソフトウェアをインストールする](#)」の手順を参照してください。

- 7 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。
プロビジョニングソフトウェアによって WebLogic マシンが作成されます。
- 8 **WebLogic** マシンが作成されたことを確認します。
 - a. ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebLogic 9**」をクリックします。
 - b. 「**WebLogic Machine Installation: View Installations**」リンクをクリックします。
「**Component Details Where Installed**」ページが表示されます。「**Hosts Where Installed**」表に、作成した WebLogic マシン (拡張子 `-machine` が付く) が表示されます。

次の手順 WebLogic ドメインに、WebLogic マシンを登録します。手順については、48 ページの「[ドメインに WebLogic マシンを登録する](#)」を参照してください。

管理対象サーバーの管理に WebLogic マシンを使用するには、管理対象サーバーに Node Manager を使用する指示を行う必要があります。33 ページの「[WebLogic 管理対象サーバーを作成する](#)」を参照してください。

▼ ドメインに **WebLogic** マシンを登録する

WebLogic マシンの作成後は、WebLogic ドメインにマシンを登録する必要があります。この手順は、ドメインに WebLogic マシンを登録する方法を説明しています。

- 始める前に WebLogic マシンを登録する前に、WebLogic ドメインを作成してください。詳細については、28 ページの「WebLogic 9 ドメインと管理サーバーを作成する」を参照してください。
- 1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで、「WebLogic 9」をクリックします。
 - 2 「WebLogic Machine Installation: Enroll」リンクをクリックします。
「Plans Details Run」ページが表示されます。
 - 3 「Current Installations」リストから、登録する WebLogic マシンを選択します。
 - 4 「Run Selected Installations」リンクをクリックします。
「Plans Details Run」ページが再表示され、プランのパラメータとオプションが表示されます。
 - 5 「Logical Host for Domain Admin Server」フィールドに管理サーバーの論理ホスト名を入力します。
 - 6 「Java Arguments Used for weblogic.WLST」フィールドで、WebLogic Scripting Tool (WLST) で使用する適切なオプションをすべて入力します。
管理サーバーで SSL を使用している場合は、SSL 証明書を提示するために次のオプションを指定します。これらの引数は、空白文字で区切り、1 行で指定してください。

```
-Dweblogic.security.SSL.ignoreHostnameVerification=true  
-Dweblogic.security.TrustKeyStore=DemoTrust
```
 - 7 使用する環境に適した追加のオプションまたは制限をすべて指定します。
 - 8 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

WebLogic ドメイン、サーバー、およびクラスタの管理

この節では、WebLogic サーバーをインストールしたあとに WebLogic サーバーおよびクラスタで一般に実行するタスクを説明します。

ドメインと Administrative Server

- 50 ページの「WebLogic ドメインと管理サーバーを削除する」
- 51 ページの「WebLogic ドメインまたは管理サーバーを起動する」

クラスタ

- 52 ページの「クラスタを起動または停止する」
- 53 ページの「WebLogic クラスタを削除する」

- 54 ページの「WebLogic クラスタメンバーを削除する」

WebLogic マシン

- 54 ページの「Node Manager マシンを起動する」
- 55 ページの「Node Manager マシンを停止する」
- 55 ページの「ドメインから Node Manager マシンを削除する」
- 56 ページの「Node Manager マシンをアンインストールする」

管理対象サーバー

- 57 ページの「管理対象サーバーを起動する」
- 58 ページの「管理対象サーバーを停止する」
- 58 ページの「管理対象サーバーを削除する」
- 59 ページの「管理対象サーバーに追加 CLASSPATH 要素を追加する」

WebLogic ドメインと管理サーバーの管理

この節では、WebLogic ドメインと管理サーバーを管理する手順を説明します。

▼ WebLogic ドメインと管理サーバーを削除する

プロビジョニングシステムを介して WebLogic ドメインを削除することで、自動的に次のタスクを実行します。

- WebLogic AdminServer コンポーネントおよび仮想ホストのアンインストール。
このタスクは管理サーバーを削除します。「markOnly」オプションを選択した場合、AdminServer 仮想ホストだけが削除されます。
- ドメイン内に属するすべての管理対象サーバーコンポーネントおよび仮想ホストのアンインストール。
この操作を行うと、「markOnly」オプションを選択している場合を除き、WebLogic 環境内の管理対象サーバーも削除されます。
- ドメイン内に属するすべてのクラスタコンポーネントおよび仮想ホストのアンインストール。
この操作を行うと、「markOnly」オプションを選択している場合を除き、WebLogic 環境内のクラスタも削除されます。
- アプリケーションコンポーネント、ライセンス構成、およびアプリケーションの削除。

注 - WebLogic 仮想ホストは、プラグインに属さないコンポーネントを含むことはできません。WebLogic ドメインを正しく削除するには、ドメインアンインストールプランを実行する前に、プラグインに属さないすべてのコンポーネントを削除する必要があります。

始める前に WebLogic ドメインを削除するには、ユーザーは、コンポーネントが含まれるフォルダ上の Run Component Procedures アクセス権を有するユーザーグループに属する必要があります。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、Allow on Host Set アクセス権も必要です。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**Domain Management: Remove**」リンクをクリックします。
プランの「**Details**」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
プランの「**Run**」ページが表示されます。
- 4 ターゲットホストを選択します。
WebLogic ソフトウェアをインストールしたときに作成された仮想ホストをターゲットとします。20 ページの「[WebLogic ソフトウェアをインストールする](#)」の手順を参照してください。

注-ターゲットホストは、com.sun.weblogic#InstallHS ホストセットのメンバーである必要があります。

- 5 「**WebLogic Domain Name**」フィールドに WebLogic ドメインの名前を入力します。
- 6 プロビジョニングシステムから WebLogic ドメイン、管理サーバー、クラスタ、および管理対象サーバーを削除し、WebLogic 環境でドメインを動作させ続ける場合は、「markOnly」オプションを選択します。
- 7 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ WebLogic ドメインまたは管理サーバーを起動する

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**Domain Management: Start**」リンクをクリックします。
「component Details」ページが表示されます。
- 3 「**Component Procedures**」リストで、**StartAdminServer** プロシージャを含む行を選択し、「**Run**」をクリックします。
プランの「**Run**」ページが表示されます。

- 4 起動する必要がある管理サーバーを選択します。
管理対象サーバーは、*host (install-path)* の形式に従います。*host* は物理ホスト名およびドメイン名を、*install-path* は WebLogic BEA ホームディレクトリを示します。管理サーバー名は `server_wls_managedServerName` と表示されます (たとえば `server_weblogic (admin_wls)`)。
- 5 「Run Selected Installations」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 6 プラン変数を設定します。
 - a. (省略可能)Java に渡される標準メモリー引数をオーバーライドするには、「VmArgs」フィールドに名前を入力します。
「vmArgs」フィールドに使用される形式は、`-virtualMachineName` です。たとえば `-Xms32m -Xmx200m` のようになります。
 - b. サーバーが起動したことを確認する前にプロビジョニングシステムが待機する期間を指定するには、「Seconds to Wait Before Failing Verify Step」フィールドに秒数を入力します。
- 7 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

WebLogic クラスタの管理

この節では、クラスタを起動、停止、および削除する方法を説明します。

▼ クラスタを起動または停止する

クラスタを起動または停止すると、クラスタ内のすべてのクラスタメンバーを起動または停止することになります。

- 1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで「WebLogic 9」をクリックします。
- 2 「Cluster Management: Start or Stop」リンクをクリックします。
「component Details」ページが表示されます。
- 3 「Component Procedures」リストで、**Start** または **Stop** プロシージャーを含む行を選択し、「Run」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。

- 4 起動または停止するクラスタを選択します。
クラスタ名は `installPath` の一部です。
- 5 「**Run Selected Installations**」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 6 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ WebLogic クラスタを削除する

クラスタを削除すると、そのクラスタに関連付けられたすべてのクラスタメンバーも削除されます。

管理対象サーバーの役割に戻るクラスタメンバーの動作の詳細については、[54 ページ](#)の「[WebLogic クラスタメンバーを削除する](#)」を参照してください。

注-管理対象サーバーをクラスタから削除すると、管理対象サーバーは停止されます。引き続き管理対象サーバーを使用する場合は、管理対象サーバーを再起動する必要があります。[57 ページ](#)の「[管理対象サーバーを起動する](#)」を参照してください。

始める前に クラスタを削除するには、ユーザーは、コンポーネントが含まれるフォルダ上の `Run Component Procedures` アクセス権を有するユーザーグループに属する必要があります。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、`Allow on Host Set` アクセス権も必要です。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**Cluster Management: Remove**」リンクをクリックします。
プランの「Details」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 4 「**Target Host**」フィールドで、クラスタをホストするドメインを選択します。
- 5 「**Plan Variables**」セクションの「**WebLogic Cluster Name**」フィールドで、**WebLogic** インタフェースに表示されるクラスタ名を入力します。
- 6 プロビジョニングシステムから **WebLogic** クラスタを削除するが、そのクラスタを **WebLogic** 環境で動作させ続ける場合は、「`markOnly`」オプションを選択します。
- 7 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ WebLogic クラスタメンバーを削除する

クラスタメンバーを削除すると、クラスタメンバーコンポーネントが管理対象サーバーから削除され、クラスタメンバーとして動作していた管理対象サーバーが元の状態に戻ります。クラスタをターゲットとしていたアプリケーション、およびクラスタメンバーは、再起動後、管理対象サーバーによりホストされなくなります。管理対象サーバーを直接ターゲットとしていたアプリケーションは、引き続き管理対象サーバーをターゲットとします。

クラスタから管理対象サーバーが削除されると、管理対象サーバーは停止状態のままになります。引き続き管理対象サーバーを使用する場合は、管理対象サーバーを再起動する必要があります。57 ページの「[管理対象サーバーを起動する](#)」を参照してください。

始める前に クラスタメンバーを削除するには、ユーザーは、コンポーネントが含まれるフォルダ上の Run Component Procedures アクセス権を有するユーザーグループに属する必要があります。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、Allow on Host Set アクセス権も必要です。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**Clusters Member Management: Leave**」リンクをクリックします。
プランの「**Details**」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
プランの「**Run**」ページが表示されます。
- 4 削除する管理対象サーバーを選択します。
- 5 プロビジョニングシステムから **WebLogic** クラスタメンバーを削除するが、**WebLogic** 環境でクラスタメンバーを動作させ続ける場合は、「**markOnly**」オプションを選択します。
- 6 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

WebLogic マシンの管理

▼ Node Manager マシンを起動する

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 9**」をクリックします。

- 2 「**WebLogic Machine Installation: Start**」リンクをクリックします。
プランの「Details」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 4 ターゲットホストを選択します。
WebLogic マシンをインストールしたときに作成された仮想ホストをターゲットとします。[42 ページの「WebLogic マシンの作成」](#)の手順を参照してください。

注-ターゲットホストは、`com.sun.weblogic9#InstallHS` ホストセットのメンバーである必要があります。

- 5 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ **Node Manager** マシンを停止する

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**WebLogic Machine Installation: Stop**」リンクをクリックします。
プランの「Details」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 4 ターゲットホストを選択します。
WebLogic マシンをインストールしたときに作成された仮想ホストをターゲットとします。[42 ページの「WebLogic マシンの作成」](#)の手順を参照してください。

注-ターゲットホストは、`com.sun.weblogic#InstallHS` ホストセットのメンバーである必要があります。

- 5 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ **ドメインから Node Manager** マシンを削除する

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebLogic 9**」をクリックします。

- 2 「**WebLogic Machine Installation: Unenroll**」リンクをクリックします。
「Plans Details Run」ページが表示されます。
- 3 「**Current Installations**」リストから、登録解除する **WebLogic** マシンを選択します。
- 4 「**Run Selected Installations**」リンクをクリックします。
「Plans Details Run」ページが再表示され、プランのパラメータとオプションが表示されます。
- 5 「**Logical Host for Domain Admin Server**」フィールドで、**WebLogic** マシンを登録解除するドメインの論理ホスト名を入力します。
- 6 使用する環境に適した追加のオプションまたは制限をすべて指定します。
- 7 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ **Node Manager** マシンをアンインストールする

WebLogic マシンのアンインストール時は、Node Manager アプリケーションを停止し、システムから Machine コンポーネントを削除します。

始める前に WebLogic マシンを複数のドメインに登録している場合は、まず、システムの登録先であるすべてのドメインで、システムを登録解除する必要があります。詳細については、[55 ページの「ドメインから Node Manager マシンを削除する」](#)を参照してください。

WebLogic マシンを登録しているドメインが1つだけの場合は、次の手順を使用してプランを1つ実行することによって登録解除およびアンインストールを行えます。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**WebLogic Machine Installation: Uninstall**」リンクをクリックします。
プランの「Details」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 4 「**Current Installations**」リストから、アンインストールする **WebLogic** マシンを選択します。
- 5 「**Run Selected Installations**」リンクをクリックします。
「Plans Details Run」ページが再表示され、プランのパラメータとオプションが表示されます。

- 6 **WebLogic** マシンを登録しているドメインが1つだけの場合は、「**Logical Host for Domain Admin Server**」フィールドでドメインを指定します。
「Logical Host for Domain Admin Server」フィールドは空のままにして、すべてのドメインの WebLogic マシンの登録を解除します。
- 7 使用する環境に適した追加のオプションまたは制限をすべて指定します。
- 8 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

WebLogic 管理対象サーバーの管理

▼ 管理対象サーバーを起動する

始める前に 管理対象サーバーを起動するには、ユーザーは、コンポーネントが含まれるフォルダ上の Run Component Procedures アクセス権を有するユーザーグループに属する必要があります。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、Allow on Host Set アクセス権も必要です。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**Application Server Management: Start**」リンクをクリックします。
「Plans Datail Run」 ページが表示されます。
- 3 起動する必要がある管理対象サーバーを選択します。
管理対象サーバーは *host (install-path)* の形式に従います。*host* は物理ホストの名前を表し、*install-path* は管理対象サーバーの名前を表します。管理対象サーバー名は *server_wls_managedServerName* と表示されます。たとえば、*server_wls_Server-One* となります。
- 4 「**Run Selected Installations**」をクリックします。
プランの「Run」 ページが表示されます。
- 5 プラン変数を設定します。
 - a. (省略可能) **Java** に渡される標準メモリー引数をオーバーライドするには、「VmArgs」フィールドに名前を入力します。
「VmArgs」フィールドに使用される形式は、*-virtualMachineName* です。たとえば *-Xms32m -Xmx200m* のようになります。

- b. サーバーが起動したことを確認する前にプロビジョニングシステムが待機する期間を指定するには、「**Seconds to Wait Before Failing Verify Step**」フィールドに秒数を入力します。

- 6 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ 管理対象サーバーを停止する

始める前に 管理対象サーバーを停止するには、ユーザーは、コンポーネントが含まれるフォルダ上の Run Component Procedures アクセス権を有するユーザーグループに属する必要があります。また、コンポーネントの配備先のホストセットに関しては、Allow on Host Set アクセス権も必要です。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**Application Server Management: Stop**」リンクをクリックします。
「Plans Detail Run」ページが表示されます。
- 3 起動する必要がある管理対象サーバーを選択します。
管理対象サーバーは *host (install path)* の形式に従います。 *host* は物理ホストの名前を表し、 *install path* は管理対象サーバーの名前を表します。管理対象サーバー名は *server_domainName_managedServerName* と表示されます。たとえば、 *server_wls_Server-One* のようになります。
- 4 「**Run Selected Installations**」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 5 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ 管理対象サーバーを削除する

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**Application Server Management: Remove**」リンクをクリックします。
プランの「Details」ページが表示されます。
- 3 「**Run**」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 4 削除する管理対象サーバーを選択します。

- 5 必要に応じてプラン変数を変更します。
 - a. **WebLogic** 管理対象サーバーの名前を入力します。
 - b. 管理対象サーバーが登録されている **WebLogic** ドメインの名前を入力します。
 - c. プロビジョニングシステムから **WebLogic** 管理対象サーバーを削除するが、**WebLogic** 環境で管理対象サーバーを動作させ続ける場合は、「markOnly」オプションを選択します。
- 6 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

▼ 管理対象サーバーに追加 CLASSPATH 要素を追加する

- 1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで「WebLogic 9」をクリックします。
- 2 「Application Server Management: Start」リンクをクリックします。
「component Details」ページが表示されます。
- 3 「Component Procedures」リストで、setAdditionalClasspath プロシージャを含む行を選択し、「Run」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 4 更新する管理対象サーバーを選択します。
管理対象サーバーは *host (install path)* の形式に従います。*host* は物理ホストの名前を表し、*install path* は管理対象サーバーの名前を表します。管理対象サーバー名は *server_domainName_managedServerName* と表示されます。たとえば、*server_wls_Server-One* のようになります。
- 5 「Run Selected Installations」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 6 追加 CLASSPATH 要素を入力します。
追加 CLASSPATH 要素は、WebLogic 管理対象サーバー起動スクリプトで定義されているデフォルトの CLASSPATH に加えられます。この起動スクリプトは、管理対象サーバーが作成されたときに定義されたものです。33 ページの「WebLogic 管理対象サーバーを作成する」を参照してください。
- 7 (省略可能) 追加 classpath 要素をただちに有効にするには、「Restart Server」を選択します。
- 8 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

WebLogic 9 プラグインを使用したアプリケーションの配備と管理

WebLogic 9 プラグインは、いくつかの固有のコンポーネントタイプを提供し、エンタープライズアプリケーションを取得、プロビジョニングできるようにします。この章の内容は次のとおりです。

- 61 ページの「WebLogic アプリケーションの取得と編集」
- 85 ページの「WebLogic アプリケーションのサービスの構成」
- 96 ページの「CLI を使用した WebLogic の作業」
- 100 ページの「プランの使用法」
- 100 ページの「障害追跡」

WebLogic アプリケーションの取得と編集

「WebLogic Common Tasks」ページでは、WebLogic Enterprise、EJB テクノロジー、および Web アプリケーションの取得、構成、および配備を行うことができます。

次の節で説明する、複数の特別なタスクを実行できます。

- 62 ページの「アプリケーションアーカイブを取得する」
- 63 ページの「配備プランを取得する」
- 64 ページの「共有 J2EE ライブラリを取得する」
- 65 ページの「アプリケーションアーカイブと配備プランをコンテナにグループ化する」

注 - Sun N1 Service Provisioning System の外部では、WebLogic アプリケーションの配備や管理を行わないでください。プロビジョニングソフトウェアを使用する場合、プロビジョニングソフトウェアのみを使用して WebLogic アプリケーションを管理する必要があります。

▼ アプリケーションアーカイブを取得する

この手順は、エンタープライズアプリケーション (EAR)、Web アプリケーション (WAR)、および Java アーカイブ (JAR) ファイルを取得する方法を説明しています。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**Application Archives: Create**」リンクをクリックします。
- 3 このコンポーネントの名前を入力します。
- 4 (省略可能)このコンポーネントのラベルを入力します。
- 5 (省略可能)このコンポーネントの説明を入力します。
- 6 「**Import From Host**」フィールドで、取得するアプリケーションがあるシステムを指定します。
システムは、2種類の方法で指定できます。
 - 取得するアプリケーションがあるシステムの名前を入力し、「**Refresh**」リンクをクリックします。
 - 「**Select From List**」リンクをクリックし、「**Select Host From List**」ウィンドウの「**Current Found Hosts**」リストからシステムを選択します。
- 7 階層をナビゲートして、取得するエンタープライズアプリケーションを探します。
- 8 アプリケーションに適したオプションを選択します。
アプリケーションには、次のオプションを設定できます。
 - 前回のチェックインから変更のないアプリケーションアーカイブをチェックイン。
 - アプリケーションにユーザーおよびグループの所有アクセス権を割り当て。
- 9 「**Path of the Resource Descriptor File**」フィールドに、コンポーネントのリソース記述子ファイルへのパスを入力します。
リソース記述子ファイルは、コンポーネントのリソースを構成するファイルとディレクトリに使用する、所有者、グループ、およびアクセス権の設定を指定します。リソース記述子についての詳細は、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 XML スキーマリファレンスガイド』の「リソース記述子ファイルの使用」を参照してください。
- 10 「**Check-in Selected Item**」をクリックします。
- 11 「**check-in**」ページの情報を確認して、「**Continue to Check-in**」をクリックします。

次の手順 アプリケーションの配備にプランを使用する場合は、まず配備プランを取得して、その後、配備プランとともにアプリケーションアーカイブコンポーネントを Application Archive Container コンポーネントにグループ化する必要があります。配備プランの取得についての詳細は、63 ページの「[配備プランを取得する](#)」を参照してください。

▼ 配備プランを取得する

独自の XML 配備プランを作成して、複数のコンポーネントで構成される複合的なエンタープライズアプリケーションおよび Web アプリケーションを効果的に配備できます。これによって、配備プランおよび配備に必要なアプリケーションアーカイブコンポーネントすべてを保持するコンテナにこれらのプランを含めることができます。

この手順では、配備プランの取得方法について説明しています。XML の配備プランの作成方法についての詳細は、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 プランとコンポーネントの開発者ガイド』を参照してください。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**WebLogic 9 Common Tasks**」ページの「**Deployment Plans**」セクションで、「**Create**」をクリックします。
- 3 このコンポーネントの名前を入力します。
- 4 (省略可能)このコンポーネントのラベルを入力します。
- 5 (省略可能)このコンポーネントの説明を入力します。
- 6 「**Import From Host**」フィールドで、取得するプランがあるシステムを指定します。システムは、2 種類の方法で指定できます。
 - 取得するプランがあるシステムの名前を入力し、「**Refresh**」リンクをクリックします。
 - 「**Select From List**」リンクをクリックし、「**Select Host From List**」ウィンドウの「**Current Found Hosts**」リストからシステムを選択します。
- 7 階層をナビゲートして、取得するプランを探します。
- 8 プランに適したオプションを選択します。プランには、次のオプションを設定できます。
 - 前回のチェックインから変更のないプランをチェックイン。
 - プランにユーザーおよびグループの所有アクセス権を割り当て。

- プランを構成テンプレートに指定。「Configuration Template」チェックボックスにチェックすると、プランおよびすべての関連付けられたコンポーネントを保持するコンテナに、プランのすべてのコンポーネント変数が追加されます。その後は、このコンテナを使用してアプリケーションを配備するときに、これらの変数を編集できます。
- 9 「Path of the Resource Descriptor File」フィールドに、コンポーネントのリソース記述子ファイルへのパスを入力します。
リソース記述子ファイルは、コンポーネントのリソースを構成するファイルとディレクトリに使用する、所有者、グループ、およびアクセス権の設定を指定します。リソース記述子についての詳細は、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 XMLスキーマリファレンスガイド』の「リソース記述子ファイルの使用」を参照してください。
 - 10 「Check-in Selected Item」をクリックします。
 - 11 「check-in」ページの情報を確認して、「Continue to Check-in」をクリックします。

次の手順 アプリケーションの配備にプランを使用するには、プランと関連付けられたアプリケーションアーカイブとを Application Archive コンテナにグループ化する必要があります。詳細については、65 ページの「アプリケーションアーカイブと配備プランをコンテナにグループ化する」を参照してください。

▼ 共有 J2EE ライブラリを取得する

- 1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで、「WebLogic 9」をクリックします。
- 2 「WebLogic 9 Common Tasks」ページの「Shared J2EE Libraries」セクションで「Create」をクリックします。
- 3 このコンポーネントの名前を入力します。
- 4 (省略可能)このコンポーネントのラベルを入力します。
- 5 (省略可能)このコンポーネントの説明を入力します。
- 6 「Import From Host」フィールドで、取得する J2EE ライブラリがあるシステムを指定します。
システムは、2種類の方法で指定できます。
 - 取得するプランがあるシステムの名前を入力し、「Refresh」リンクをクリックします。

- 「**Select From List**」リンクをクリックし、「**Select Host From List**」ウィンドウの「**Current Found Hosts**」リストからシステムを選択します。
- 7 階層をナビゲートして、取得するライブラリを見つけます。
 - 8 ライブラリに適したオプションを選択します。
J2EE ライブラリには次のオプションを設定できます。
 - 前回のチェックインから変更のないライブラリをチェックイン。
 - ライブラリにユーザーおよびグループの所有アクセス権を割り当て。
 - 9 「**Path of the Resource Descriptor File**」フィールドに、コンポーネントのリソース記述子ファイルへのパスを入力します。
リソース記述子ファイルは、コンポーネントのリソースを構成するファイルとディレクトリに使用する、所有者、グループ、およびアクセス権の設定を指定します。リソース記述子についての詳細は、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 XMLスキーマリファレンスガイド』の「リソース記述子ファイルの使用」を参照してください。
 - 10 「**Check-in Selected Item**」をクリックします。
 - 11 「**check-in**」ページの情報を確認して、「**Continue to Check-in**」をクリックします。

▼ アプリケーションアーカイブと配備プランをコンテナにグループ化する

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**WebLogic Common Tasks**」ページの「**Application Archive With Deployment Plan Container:**」セクションで、「**Create**」をクリックします。
「**Component Details Edit**」ページが表示されます。
- 3 コンテナコンポーネントの名前を入力します。
- 4 「**Platform**」ドロップダウンメニューから、適切なコンテナのプラットフォームを選択します。
- 5 このコンテナコンポーネントのラベルを入力します。
- 6 このコンテナコンポーネントの説明を入力します。

- 7 グループ化する **Application Archive** コンポーネントと配備プランを選択します。
 - a. 「**Referenced Components**」表の「**Type**」ドロップダウンメニューから **Application Archive** コンテナに含めるコンポーネントタイプを選択します。
 - **Application Archive** を指定するには、`com.sun.weblogic9#ApplicationArchive` コンポーネントタイプを選択します。
 - 配備プランを指定するには、`com.sun.weblogic9#DeploymentPlan` コンポーネントタイプを選択します。
 - b. **Application Archive** コンテナに含めるコンポーネントを選択します。
 - 既存のコンポーネントを使用する場合は、次の手順に従います。
 - i. 「**Actions**」列の「**Reference Existing**」リンクをクリックします。
「Reference Existing Components in Current Component」ウィンドウが表示されます。
 - ii. 「**Current Component**」ウィンドウの「**Reference Existing Components**」で、コンポーネントを選択します。
「Change Folder」リンクをクリックしてファイルシステムをナビゲートし、使用するコンポーネントを探します。
 - 新しいコンポーネントを使用する場合は、次の手順に従います。
 - i. 「**Actions**」列の「**Check In New**」リンクをクリックします。
「Components Details Edit」ページが表示されます。
 - ii. このコンポーネントの名前を入力します。
 - iii. (省略可能) このコンポーネントのラベルを入力します。
 - iv. (省略可能) このコンポーネントの説明を入力します。
 - v. 「**Import From Host**」フィールドで、取得するアプリケーションがあるシステムを指定します。
システムは、2種類の方法で指定できます。
 - 取得するアプリケーションがあるシステムの名前を入力し、「**Refresh**」リンクをクリックします。
 - 「**Select From List**」リンクをクリックし、「**Select Host From List**」ウィンドウの「**Current Found Hosts**」リストからシステムを選択します。
 - vi. 階層をナビゲートして、取得するアプリケーションを見つけます。

vii. アプリケーションに適したオプションを選択します。

アプリケーションには、次のオプションを設定できます。

- 前回のチェックインから変更のないアプリケーションアーカイブをチェックイン。
- アプリケーションにユーザーおよびグループの所有アクセス権を割り当て。
- プランをチェックインしている場合は、プランを構成テンプレートとして指定できます。「Configuration Template」チェックボックスにチェックすると、プランおよびすべての関連付けられたコンポーネントを保持するコンテナに、プランのすべてのコンポーネント変数が追加されます。その後は、このコンテナを使用してアプリケーションを配備するときに、これらの変数を編集できます。

viii. 「Path of the Resource Descriptor File」フィールドに、コンポーネントのリソース記述子ファイルへのパスを入力します。

リソース記述子ファイルは、コンポーネントのリソースを構成するファイルとディレクトリに使用する、所有者、グループ、およびアクセス権の設定を指定します。リソース記述子についての詳細は、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 XMLスキーマリファレンスガイド』の「リソース記述子ファイルの使用」を参照してください。

ix. 「Check-in Selected Item」をクリックします。

x. 「check-in」ページの情報を確認して、「Continue to Check-in」をクリックします。

8 Application Archive コンテナに含めるそれぞれの Application Archive または 配備プランごとに、前の手順を繰り返します。

9 「Component Variables」表で、Application Archive コンテナの変数設定を設定します。

- 新しい変数を作成する場合は、次の手順に従います。
 - a. 1行目の「Variable」列のテキストフィールドに、作成する変数の名前を入力します。
 - b. 「Prompt」列のテキストフィールドに、変数の説明を入力します。
 - c. 「Value for This Component」列のテキストフィールドに、使用する変数値を入力します。
 - d. 「Create」リンクをクリックします。

- 既存の変数値を編集する場合は、次の手順に従います。

a. 編集する変数のチェックボックスを選択します。

b. 「Value for This Component」列のテキストフィールドに変数値を入力します。

次のリストに、AppArchiveWithPlan コンポーネントの変数のうち、更新する可能性が高い変数を示します。

deploymentName 必須。アプリケーション用に使用する配備名を指定します。

appVersion 任意。配備するアプリケーションのバージョンを指定します。この変数の値は、アプリケーションを再配備できるようにするために指定します。

stagingMode 必須。アプリケーションの配備のステージモードを指定します。有効な値は、stage (デフォルト)、nostage、および external_stage です。

stage は、管理サーバーにコンテナリソースを配備し、WebLogic ソフトウェアはターゲットホストにアプリケーションアーカイブファイルをコピーします。

nostage は、ターゲットホストに対してアプリケーションアーカイブファイルをアクセス可能にしますが、ターゲットホストにアプリケーションアーカイブファイルをコピーしません。

external_stage は、管理サーバーにコンテナリソースを配備し、N1 SPS ソフトウェアが、ターゲットホストのステージ領域にアプリケーションアーカイブファイルを配備します。

target 必須。配備に使用するターゲットホストを指定します。

subModuleTargets 任意。配備のサブモジュールターゲットを指定します。

adminServerHostName 必須。ドメインの管理サーバーの論理ホスト名を指定します。

installPath 必須。アプリケーションアーカイブのインストールの場所を指定します。

stagingMode 変数に stage または external_stage を指定した場合は、アプリケーションアーカイブをインストールする管理サーバー上の場所を指定します。

stagingMode 変数に nostage を指定した場合は、アプリケーションアーカイブへのネットワークパスを指定します。この場所は、NFS を通じてターゲットホストにアク

セス可能である必要があります。

- 10 「Check In」をクリックします。
- 11 「Check-in」ページの情報を確認して、「Continue to Check-in」をクリックします。

WebLogic アプリケーションの配備

WebLogic 9 プラグインには WebLogic に固有の複数のコンポーネントタイプが含まれています。これらのコンポーネントタイプを使用すると、最も一般的な WebLogic アプリケーションコンポーネントの多くを素早くモデル化し、特定のリソースとインストール、アンインストール、エクスポート、およびスナップショット動作を自動的に関連付けることができます。サーバーやクラスタを作成、管理する際には、コンポーネントタイプの多くがソフトウェアにより使用されます。その結果、通常は少数のコンポーネントタイプのみで作業を行います。

WebLogic 9 プラグインが、アプリケーションをモデル化および定義するために提供するコンポーネントタイプは次のとおりです。

- **Application Archive** コンポーネントタイプ - エンタープライズアプリケーション、Web アプリケーション、Java アーカイブ (JAR) ファイルをモデル化するためにこのコンポーネントタイプを使用します。コンポーネントには、エンタープライズアプリケーションアーカイブ (EAR)、Web アプリケーション (WAR)、JAR ファイルなどのアプリケーションアーカイブ、またはパッケージとしてのアーカイブの拡張バージョンを含めることができます。コンポーネントプロシージャから直接配備することも、Application Archive With Plan コンテナコンポーネントとともにアプリケーションを配備するために配備プランとともにこのコンポーネントをグループ化することもできます。
- **Deployment Plan** コンポーネントタイプ - アプリケーションを配備する独自の XML プランを作成するためにこのコンポーネントを使用します。Deployment Plan コンポーネントを使用する場合は、Application Archive With Plan コンテナコンポーネントに、Deployment Plan コンポーネントと関連付けられた Application Archive コンポーネントプランを含める必要があります。
- **Application Archive With Plan** コンテナコンポーネントタイプ - Application Archive コンポーネントを Deployment Plan とともにグループ化するためにこのコンポーネントを使用します。このコンポーネントタイプを使用して、配備用にタスクを定義する配備プランと既存のアプリケーションコンポーネントを 1 組にできます。配備に Application Archive With Plan コンテナを使用する場合は、コンテナ変数セットに加えたすべての変更が、配備する Application Archive の変数値よりも優先されます。
- **Shared J2EE Library** コンポーネントタイプ - アプリケーションが共有の J2EE ライブラリにアクセスできるようにするためにこのコンポーネントを使用します。

これらのコンポーネントの作成方法については、61 ページの「WebLogic アプリケーションの取得と編集」を参照してください。

アプリケーションの必要性に応じて、アプリケーションコンポーネントを配備する前に WebLogic サービスを構成しなければならない場合があります。サービスを構成するには、85 ページの「WebLogic アプリケーションのサービスの構成」で説明しているコンポーネントタイプの使用が必要となる場合があります。

ここでは、次の配備作業を行う方法を説明します。

- 70 ページの「アプリケーションをインストールする」
- 74 ページの「共有 J2EE ライブラリをインストールする」
- 76 ページの「アプリケーションを起動する」
- 78 ページの「アプリケーションを停止する」
- 79 ページの「アプリケーションをアンインストールする」
- 80 ページの「以前のバージョンのアプリケーションをアンインストールする」
- 81 ページの「アプリケーションを更新する」
- 83 ページの「Application Archive With Plan コンポーネントの Deployment Plan を更新する」

▼ アプリケーションをインストールする

Application Archive コンポーネントのインストールは、コンポーネントプロシージャから直接行うか、Application Archive With Plan コンポーネントを使用して行います。いずれの場合も、ターゲットホストとして Weblogic 管理対象サーバーまたはクラスタを使用する必要があります。インストールプロセスにより、次の2つの主要タスクが実行されます。

- ターゲットにアプリケーションアーカイブをインストールする。
 - WebLogic 管理サーバーを使用してアプリケーションアーカイブを登録する。
- 1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで、「WebLogic 9」をクリックします。
 - 2 「Components」リンクをクリックします。
「Components」ページが表示されます。
 - 3 配備する Application Archive または Application Archive With Plan コンポーネントの場所にナビゲートします。
「Change Folder」リンクをクリックしてファイルシステムを通じて参照し、アプリケーションアーカイブの場所を選択します。
 - 4 「Component」列で、配備する Application Archive または Application Archive With Plan コンポーネントをクリックします。
「Components Details」ページが表示されます。

- 5 「Component Procedures」表で、実行する配備のタイプを選択します。
- アプリケーションを配備してターゲットホストで起動するには、「Install: Default」行で「Run」リンクをクリックします。
この手順は、Application Archive コンポーネントを直接インストールする場合に使用します。
 - **Deployment Plan** を使用してアプリケーションを配備するには、「Install: deployAppPlan」行で「Run」リンクをクリックします。
この手順は、Application Archive With Plan コンテナに Deployment Plan とともにグループ化された Application Archive コンポーネントをインストールする場合に使用します。
 - ターゲットホストにアプリケーションを配備しても、アプリケーションを起動および有効にしない場合は、「Install: Distribute」行または「Install: DistributeAppPlan」行で「Run」リンクをクリックします。
この手順は、一般モードではなく管理モードでアプリケーションを起動する場合に使用します。Application Archive With Plan コンポーネントを使用している場合は、「Install: DistributeAppPlan」プロシージャの「Run」リンクをクリックします。
「Plans Details Run」ページが表示されます。
- 6 「Plan Parameters」領域で、配備する ApplicationArchive コンポーネントの変数設定を選択します。
- このコンポーネントに対して変数設定が指定されている場合、メニューから適切な設定を選択します。
 - メニューから設定が使用できない場合は、「Select From List」をクリックします。
「Select Variable Settings From List」ウィンドウが表示されます。
 - 変数設定の新しいセットを作成するには、「Create Set」を選択します。
次のリストに、ApplicationArchive コンポーネントの変数のうち、更新する可能性が高い変数を示します。
- | | |
|----------------|---|
| 変数セット名 | 必須。ユーザーが作成する新しい変数設定セットの名前 |
| deploymentName | 必須。アプリケーションの配備名を指定します。 |
| installName | 必須。配備する Application Archive の名前を指定します。 |
| appVersion | 任意。配備するアプリケーションのバージョンを指定します。この変数の値は、アプリケーションを再配備できるようにするために指定します。 |

<code>stagingMode</code>	<p>必須。アプリケーションの配備のステージモードを指定します。有効な値は、<code>stage</code> (デフォルト)、<code>nostage</code>、および <code>external_stage</code> です。</p> <p><code>stage</code> は、管理サーバーにコンテナリソースを配備し、WebLogic ソフトウェアはターゲットホストにアプリケーションアーカイブファイルをコピーします。</p> <p><code>nostage</code> は、ターゲットホストに対してアプリケーションアーカイブファイルをアクセス可能にしますが、ターゲットホストにアプリケーションアーカイブファイルをコピーしません。</p> <p><code>external_stage</code> は、管理サーバーにコンテナリソースを配備し、N1 SPS ソフトウェアが、ターゲットホストのステージ領域にアプリケーションアーカイブファイルを配備します。</p>
<code>target</code>	必須。配備に使用するターゲットホストを指定します。
<code>subModuleTargets</code>	任意。配備のアプリケーションサブモジュールターゲットを指定します。
<code>adminServerHostName</code>	必須。ドメインの Administration Server の論理ホスト名を指定します。
<code>adminDomainRootDir</code>	必須。ドメインの管理サーバーのルートディレクトリを指定します。
<code>installPath</code>	<p>必須。アプリケーションアーカイブのインストールの場所を指定します。</p> <p><code>stagingMode</code> 変数に <code>stage</code> または <code>external_stage</code> を指定した場合は、アプリケーションアーカイブをインストールする Administration Server 上の場所を指定します。</p> <p><code>stagingMode</code> 変数に <code>nostage</code> を指定した場合は、アプリケーションアーカイブへのネットワークパスを指定します。この場所は、NFS を通じてターゲットホストにアクセス可能である必要があります。</p>
	<ul style="list-style-type: none"> ■ 別のコンポーネントの変数設定を使用する場合は、「Import Set From Component」をクリックします。 <ul style="list-style-type: none"> 「Import Variable Settings」ウィンドウが表示されます。 a. 必要に応じて、インポートする変数設定を持つコンポーネントがあるフォルダにナビゲートします。

- b. コンポーネントのバージョンを選択します。

注-コンポーネントのバージョンが異なると、変数設定も異なる可能性があります。現在のコンポーネントおよびインポートする変数設定があるコンポーネントは、必ず共通の変数を共有するようにしてください。変数設定のインポート元のコンポーネントと、プランで使用するコンポーネントの間で共通に使用している変数が存在しない場合、変数設定はインポートされません。

- c. 「**Import Variable Settings**」をクリックします。

変数設定がインポートされ、表形式で表示されます。

- d. 「**Plan Details Run**」ページの「**Variable Settings**」ドロップダウンリストから、インポートした変数設定を選択し、「**Select**」をクリックします。

- ファイルに保存されているコンポーネント変数設定を使用する場合は、次の手順に従います。

- a. 「**Import Sets from File**」テキストフィールドに、使用する変数設定ファイルへのパスを入力します。

ファイルシステムをブラウズして適切なファイルを探すには、「**Browse**」ボタンをクリックします。

- b. 「**Import**」をクリックします。

変数設定がインポートされ、表形式で表示されます。

注-変数設定のインポート元のファイルと、プランで使用するコンポーネントの間で共通に使用している変数が存在しない場合、変数設定はインポートされません。

- c. 「**Plan Details Run**」ページの「**Variable Settings**」ドロップダウンリストから、インポートした変数設定を選択し、「**Select**」をクリックします。

- 7 ターゲットホストまたはターゲットホストセットを選択します。

管理対象サーバーまたは WebLogic クラスタのいずれかをターゲットに設定します。

注-ターゲットホストは、`com.sun.weblogic#DeploymentTargetHS` ホストセットのメンバーである必要があります。

- 8 「Plan Parameters」 セクションで、インストールプランで使用するオプションをすべて指定します。
 - (省略可能) インストール中に、`weblogic.Deployer` コマンドに Java の引数を渡す場合は、「Java Arguments Used for weblogic.Deployer」フィールドに引数を入力します。
`weblogic.Deployer` コマンドを使用して配備タスクを実行する方法については、BEA の WebLogic Server のマニュアル [weblogic.Deployer Command-Line Reference](http://e-docs.bea.com/wls/docs91/deployment/wldeployer.html) (<http://e-docs.bea.com/wls/docs91/deployment/wldeployer.html>) を参照してください。
 - アプリケーションをインストールする前に、以前のバージョンのアプリケーションを廃止するために一定の間隔を置く場合は、「Optional: Second to Wait Before Previous Application Retires」テキストフィールドに数字を秒単位で入力します。
 - 管理モードでアプリケーションのインストール、起動を行う場合は、「Start Application in Admin Mode」テキストフィールドに `true` と入力します。
配備システム用の管理モードでアプリケーションを起動する場合に使用します。
実稼働システム用の一般モードでアプリケーションを起動する場合は、この値を `false` に設定します。
- 9 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。
アプリケーションがターゲットホストまたはホストセットに配備されます。

▼ 共有 J2EE ライブラリをインストールする

- 1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで、「WebLogic 9」をクリックします。
- 2 「Components」リンクをクリックします。
「Components」ページが表示されます。
- 3 配備する共有 J2EE ライブラリコンポーネントの場所にナビゲートします。
「Change Folder」リンクをクリックしてファイルシステムを通じて参照し、ライブラリの場所を選択します。
- 4 「Component」列で、配備する J2EE Library コンポーネントをクリックします。
「Components Details」ページが表示されます。
- 5 「Component Procedures」表の「install: Default」行で「Run」をクリックします。
「Plans Details Run」ページが表示されます。

- 6 「Plan Parameters」領域で、配備する J2EE Library コンポーネントの変数設定を選択します。
- このコンポーネントに対して変数設定が指定されている場合、メニューから適切な設定を選択します。
 - メニューから設定が使用できない場合は、「Select From List」をクリックします。
「Select Variable Settings From List」ウィンドウが表示されます。
 - 変数設定の新しいセットを作成するには、「Create Set」を選択します。
次のリストに、J2EELibrary コンポーネントの変数のうち、更新する可能性が高い変数を示します。

変数セット名	必須。ユーザーが作成する新しい変数設定セットの名前
extensionName	必須。インストールするライブラリの名前を指定します。この名前は、マニフェストにあるライブラリの名前と一致していなければなりません。
libspectver	任意。ライブラリのバージョンを指定します。この値は、アーカイブのバージョン番号と一致していなければなりません。あるいは空白のままとしてください。
installPath	必須。ライブラリへのパスを指定します。
installUser	必須。配備後のライブラリを所有するユーザーを指定します。
 - 別のコンポーネントの変数設定を使用する場合は、「Import Set From Component」をクリックします。
「Import Variable Settings」ウィンドウが表示されます。
 - a. 必要に応じて、インポートする変数設定を持つコンポーネントがあるフォルダにナビゲートします。
 - b. コンポーネントのバージョンを選択します。

注-コンポーネントのバージョンが異なると、変数設定も異なる可能性があります。現在のコンポーネントおよびインポートする変数設定があるコンポーネントは、必ず共通の変数を共有するようにしてください。変数設定のインポート元のコンポーネントと、プランで使用するコンポーネントの間で共通に使用している変数が存在しない場合、変数設定はインポートされません。

 - c. 「Import Variable Settings」をクリックします。
変数設定がインポートされ、表形式で表示されます。

d. 「Plan Details Run」ページの「Variable Settings」ドロップダウンリストから、インポートした変数設定を選択し、「Select」をクリックします。

■ ファイルに保存されているコンポーネント変数設定を使用する場合は、次の手順に従います。

a. 「Import Sets from File」テキストフィールドに、使用する変数設定ファイルへのパスを入力します。

ファイルシステムをブラウズして適切なファイルを探すには、「Browse」ボタンをクリックします。

b. 「Import」をクリックします。

変数設定がインポートされ、表形式で表示されます。

注-変数設定のインポート元のファイルと、プランで使用するコンポーネントの間で共通に使用している変数が存在しない場合、変数設定はインポートされません。

c. 「Plan Details Run」ページの「Variable Settings」ドロップダウンリストから、インポートした変数設定を選択し、「Select」をクリックします。

7 ターゲットホストまたはターゲットホストセットを選択します。

管理対象サーバーまたは WebLogic クラスタのいずれかをターゲットに設定します。

注-ターゲットホストは、com.sun.weblogic#DeploymentTargetHS ホストセットのメンバーである必要があります。

8 インストール中に、weblogic.WLST ツールに Java の引数を渡す場合は、「Java Arguments」フィールドに引数を入力します。

weblogic.Deployer コマンドを使用して配備を実行する方法については、BEA の WebLogic Server のマニュアル [Using the WebLogic Server Scripting Tool](#)

(<http://dev.bea.com/codelibrary/code/wlst.jsp>) を参照してください。

9 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

▼ アプリケーションを起動する

アプリケーションは、管理モードまたは一般モードで起動できます。

1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで、「WebLogic 9」をクリックします。

- 2 「**Components**」リンクをクリックします。
「Components」ページが表示されます。
- 3 起動する **Application Archive** コンポーネントの場所にナビゲートします。
「Change Folder」リンクをクリックしてファイルシステムを通じて参照し、アプリケーションアーカイブの場所を選択します。
- 4 「**Component**」列で、起動する **Application Archive** コンポーネントをクリックします。
「Components Details」ページが表示されます。
- 5 「**Component Procedures**」表で、「**startApp**」行の「**Run**」リンクをクリックします。
「Plans Details Run」ページが表示されます。
- 6 ターゲットホストまたはターゲットホストセットを選択します。
管理対象サーバーまたは WebLogic クラスタのいずれかをターゲットに設定します。

注-ターゲットホストは、`com.sun.weblogic#DeploymentTargetHS` ホストセットのメンバーである必要があります。

- 7 「**Plan Parameters**」セクションで、アンインストールプランで使用するオプションをすべて指定します。
 - (省略可能) `weblogic.Deployer` コマンドに **Java** の引数を渡す場合は、「**Java Arguments Used for weblogic.Deployer**」フィールドに引数を入力します。
`weblogic.Deployer` コマンドを使用して配備タスクを実行する方法については、BEA の WebLogic Server のマニュアル [weblogic.Deployer Command-Line Reference](http://e-docs.bea.com/wls/docs91/deployment/wldeployer.html) (<http://e-docs.bea.com/wls/docs91/deployment/wldeployer.html>)を参照してください。
 - アプリケーションを起動する前に、以前のバージョンのアプリケーションを廃止するために一定の間隔を置く場合は、「**Optional: Second to Wait Before Previous Application Retires**」テキストフィールドに数字を秒単位で入力します。
 - 管理モードでアプリケーションを起動する場合は、「**Start Application in Admin Mode**」テキストフィールドに `true` と入力します。
配備システム用の管理モードでアプリケーションを起動する場合に使用します。
実稼働システム用の一般モードでアプリケーションを起動する場合は、この値を `false` に設定します。
- 8 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

▼ アプリケーションを停止する

アプリケーションを停止するか、一般モードから管理モードへ切り替えることができます。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**Components**」リンクをクリックします。
「**Components**」ページが表示されます。
- 3 停止する **Application Archive** コンポーネントの場所にナビゲートします。
「**Change Folder**」リンクをクリックしてファイルシステムを通じて参照し、**Application Archive** の場所を選択します。
- 4 「**Component**」列で、停止する **Application Archive** コンポーネントをクリックします。
「**Components Details**」ページが表示されます。
- 5 「**Component Procedures**」表の「**stopApp**」行の「**Run**」リンクをクリックします。
「**Plans Details Run**」ページが表示されます。
- 6 ターゲットホストまたはターゲットホストセットを選択します。
管理対象サーバーまたは WebLogic クラスタのいずれかをターゲットに設定します。

注-ターゲットホストは、`com.sun.weblogic#DeploymentTargetHS` ホストセットのメンバーである必要があります。

- 7 「**Plan Parameters**」セクションで、停止プランで使用するオプションをすべて指定します。
 - (省略可能) **weblogic.Deployer** コマンドに **Java** の引数を渡す場合は、「**Java Arguments Used for weblogic.Deployer**」フィールドに引数を入力します。
weblogic.Deployer コマンドを使用して配備タスクを実行する方法については、BEA の **WebLogic Server** のマニュアル **weblogic.Deployer Command-Line Reference** (<http://e-docs.bea.com/wls/docs91/deployment/wldeployer.html>) を参照してください。
 - アプリケーションを停止する前に、既存の **HTTP** セッションがすべて完了するのを待つ場合は、「**Wait for Existing HTTP Clients to Complete**」テキストフィールドに **true** と入力します。

- アプリケーションを停止して、アプリケーションを管理モードに切り替える場合は、「**Start Application in Admin Mode**」テキストフィールドに true と入力します。
配備システム用の管理モードにアプリケーションを切り替える場合に使用します。

8 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

アプリケーションがターゲットホストまたはホストセットからアンインストールされます。

▼ アプリケーションをアンインストールする

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**Components**」リンクをクリックします。
「Components」ページが表示されます。
- 3 アンインストールする **Application Archive** コンポーネントの場所にナビゲートします。
「Change Folder」リンクをクリックしてファイルシステムを通じて参照し、Application Archive の場所を選択します。
- 4 「**Component**」列で、アンインストールする **Application Archive** コンポーネントをクリックします。
「Components Details」ページが表示されます。
- 5 「**Component Procedures**」表でアプリケーションをアンインストールするプロシージャーを正しく選択します。
 - **Application Archive** コンポーネントから直接アプリケーションを再配備するには、「**Uninstall: Default**」行で「**Run**」リンクをクリックします。
 - **Application Archive With Plan** コンテナからアプリケーションを再配備するには、「**Uninstall: UninstallFromContainer**」行で「**Run**」リンクをクリックします。
「Plans Details Run」ページが表示されます。
- 6 ターゲットホストまたはターゲットホストセットを選択します。
管理対象サーバーまたは WebLogic クラスタのいずれかをターゲットに設定します。

注-ターゲットホストは、com.sun.weblogic#DeploymentTargetHS ホストセットのメンバーである必要があります。

- 7 「Plan Parameters」セクションで、アンインストールプランで使用するオプションをすべて指定します。
 - (省略可能) アンインストール中に、**weblogic.Deployer** コマンドに **Java** の引数を渡す場合は、「**Java Arguments Used for weblogic.Deployer**」フィールドに引数を入力します。
weblogic.Deployer コマンドを使用して配備タスクを実行する方法については、BEA の WebLogic Server のマニュアル [weblogic.Deployer Command-Line Reference](http://e-docs.bea.com/wls/docs91/deployment/wldeployer.html) (<http://e-docs.bea.com/wls/docs91/deployment/wldeployer.html>) を参照してください。
 - アプリケーションをアンインストールする前に、既存の HTTP セッションがすべて完了するのを待つ場合は、「**Wait for Existing HTTP Clients to Complete**」テキストフィールドに true と入力します。
 - 現在の HTTP クライアントセッションが完了するのを待たずにアンインストールする場合は、「**Ignore Current HTTP Client Sessions**」テキストフィールドに true と入力します。
 - 管理サーバーから **Application Archive** ファイルを削除する場合は、「**Remove Deployment Files**」テキストフィールドに true と入力します。
- 8 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。
アプリケーションがターゲットホストまたはホストセットからアンインストールされません。

▼ 以前のバージョンのアプリケーションをアンインストールする

N1 SPS ソフトウェアを使用しないでアプリケーションをインストールしたあとで、N1 SPS を使用してアプリケーションの更新版をインストールする場合は、以前のバージョンのアプリケーションをアンインストールできます。アプリケーションは、以前のバージョンのアプリケーションを WebLogic 9 プラグインがアンインストールできるようにするために、バージョン指定される必要があります。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**Components**」リンクをクリックします。
「**Components**」ページが表示されます。

- 3 アンインストールする **Application Archive** コンポーネントの場所にナビゲートします。
「Change Folder」リンクをクリックしてファイルシステムを通じて参照し、Application Archive の場所を選択します。
- 4 「**Component**」列で、アンインストールする **Application Archive** コンポーネントをクリックします。
「Components Details」ページが表示されます。
- 5 「**Component Procedures**」表で、「**undeployPreviousVersion**」の「**Run**」リンクをクリックします。
「Plans Details Run」ページが表示されます。
- 6 ターゲットホストまたはターゲットホストセットを選択します。
管理対象サーバーまたは WebLogic クラスタのいずれかをターゲットに設定します。

注-ターゲットホストは、`com.sun.weblogic#DeploymentTargetHS` ホストセットのメンバーである必要があります。

- 7 「**Plan Parameters**」セクションで、アンインストールプランで使用するオプションをすべて指定します。
 - 「**Version of This App Needed to Review**」テキストフィールドで、アンインストールするアプリケーションのバージョンを指定します。
 - (省略可能) `weblogic.Deployer` コマンドに **Java** の引数を渡す場合は、「**Java Arguments Used for weblogic.Deployer**」フィールドに引数を入力します。
`weblogic.Deployer` コマンドを使用して配備タスクを実行する方法については、BEA の WebLogic Server のマニュアル [weblogic.Deployer Command-Line Reference](http://e-docs.bea.com/wls/docs91/deployment/wldeployer.html) (<http://e-docs.bea.com/wls/docs91/deployment/wldeployer.html>)を参照してください。
- 8 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。
アプリケーションがターゲットホストまたはホストセットからアンインストールされます。

▼ アプリケーションを更新する

Application Archive に加えた変更についてアプリケーションを更新する場合は、管理対象サーバーまたはクラスタにアプリケーションを再配備できます。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebLogic 9**」をクリックします。

- 2 「**Components**」リンクをクリックします。
「Components」ページが表示されます。
- 3 更新する **Application Archive** コンポーネントの場所にナビゲートします。
「Change Folder」リンクをクリックしてファイルシステムを通じて参照し、Application Archive の場所を選択します。
- 4 「**Component**」列で、更新する **Application Archive** コンポーネントをクリックします。
「Components Details」ページが表示されます。
- 5 「**Component Procedures**」表でアプリケーションを更新するプロシーチャーを正しく選択します。
 - **Application Archive** コンポーネントから直接アプリケーションを再配備するには、「Install: Redeploy」行で「Run」リンクをクリックします。
 - **Application Archive With Plan** コンテナからアプリケーションを再配備するには、「Install: RedeployAppPlan」行で「Run」リンクをクリックします。
「Plans Details Run」ページが表示されます。
- 6 ターゲットホストまたはターゲットホストセットを選択します。
管理対象サーバーまたは WebLogic クラスタのいずれかをターゲットに設定します。

注-ターゲットホストは、com.sun.weblogic#DeploymentTargetHS ホストセットのメンバーである必要があります。

- 7 「**Plan Parameters**」セクションで、再配備プランで使用するオプションをすべて指定します。
 - **weblogic.Deployer** コマンドに Java の引数を渡す場合は、「**Java Arguments Used for weblogic.Deployer**」フィールドに引数を入力します。
weblogic.Deployer コマンドを使用して配備タスクを実行する方法については、BEA の WebLogic Server のマニュアル [weblogic.Deployer Command-Line Reference](http://e-docs.bea.com/wls/docs91/deployment/wldeployer.html) (<http://e-docs.bea.com/wls/docs91/deployment/wldeployer.html>)を参照してください。
 - アプリケーションの配備に **Application Archive With Plan** コンポーネントを使用している場合は、「**Path for Deployment Plan**」テキストフィールドで、**Deployment Plan** の場所を指定します。
 - 「**Required WebLogic Target for Deployment**」テキストフィールドで、更新するシステムを指定します。

- 「**Optional WebLogic Submodule Targets for Deployment**」テキストフィールドで、再配備でターゲットにするアプリケーションサブモジュールを指定します。
 - 「**Deployment Name Used for This Application**」テキストフィールドで、再配備する **Application Archive** または **Application Archive With Plan** コンポーネントの名前を指定します。
 - 「**App Version**」テキストフィールドで、再配備するアプリケーションのバージョン番号を指定します。
- 8 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。
アプリケーションがターゲットホストまたはホストセットからアンインストールされます。

▼ **Application Archive With Plan** コンポーネントの **Deployment Plan** を更新する

Application Archive With Plan コンテナコンポーネントで使用している Deployment Plan コンポーネントを変更する場合は、新しい Deployment Plan で管理対象サーバーまたはクラスタを更新できます。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**Components**」リンクをクリックします。
「Components」ページが表示されます。
- 3 新しい **Deployment Plan** で更新する **Application Archive With Plan** コンポーネントの場所にナビゲートします。
「Change Folder」リンクをクリックしてファイルシステムを通じて参照し、Application Archive With Plan コンポーネントの場所を選択します。
- 4 「**Component**」列で、更新する **Application Archive With Plan** コンポーネントをクリックします。
「Components Details」ページが表示されます。
- 5 「**Component Procedures**」表の「**install: updatePlan**」行で「**Run**」リンクをクリックします。
「Plans Details Run」ページが表示されます。

- 6 ターゲットホストまたはターゲットホストセットを選択します。
管理対象サーバーまたは WebLogic クラスタのいずれかをターゲットに設定します。

注-ターゲットホストは、`com.sun.weblogic#DeploymentTargetHS` ホストセットのメンバーである必要があります。

- 7 「Plan Parameters」セクションで、アンインストールプランで使用するオプションをすべて指定します。
- (省略可能) `weblogic.Deployer` コマンドに Java の引数を渡す場合は、「Java Arguments Used for weblogic.Deployer」フィールドに引数を入力します。
`weblogic.Deployer` コマンドを使用して配備タスクを実行する方法については、BEA の WebLogic Server のマニュアル [weblogic.Deployer Command-Line Reference](http://e-docs.bea.com/wls/docs91/deployment/wldeployer.html) (<http://e-docs.bea.com/wls/docs91/deployment/wldeployer.html>) を参照してください。
 - 使用するプランのバージョンを指定する場合は「Optional Plan Version」テキストフィールドにバージョン番号を入力します。
- 8 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。
アプリケーションがターゲットホストまたはホストセットからアンインストールされません。

エラー状態

表 5-1 WebLogic エンタープライズアプリケーションのエラー状態

アクション	条件	結果
インストール	トポロジが正しく構成されていない (ターゲットホストが正しいドメインホストをポイントしていない)	ターゲット化が失敗する
インストール	ターゲットホストが有効な WebLogic ターゲットではない	インストールが禁止される
ブラウズ/インストール/アンインストール	資格が適切に構成されていない	操作が失敗する
ブラウズ	ドメインホストでパスが正しく構成されていない	ブラウズが失敗する

WebLogic アプリケーションのサービスの構成

アプリケーションコンポーネントを配備する前に、アプリケーションの必要性に基づいて、WebLogic サービスの構成が必要となる場合があります (69 ページの「WebLogic アプリケーションの配備」で説明)。サービスを構成するには、次に示すコンポーネントタイプの使用が必要となる場合があります。

- **Data Source** コンポーネントタイプ - このコンポーネントタイプは、データベースのデータソースの取得に使用します。
- **Multi Data Source** コンポーネントタイプ - このコンポーネントタイプは、データベースのデータソースおよび関連付けられた接続プールの取得に使用します。
- **Java Messaging Service (JMS) Server** コンポーネントタイプ - このコンポーネントタイプは JMS 情報を保存、供給するサーバーの取得に使用します。
- **JMS Module** コンポーネントタイプ - このコンポーネントタイプは、JMS Queues、Topics、Connection Factories、および Destination Keys の構成モジュールの作成に使用します。
- **JMS Queue** コンポーネントタイプ - このコンポーネントタイプは、ポイントツーポイントメッセージングのメッセージングキューのインストールに使用します。
- **JMS Topic** コンポーネントタイプ - このコンポーネントタイプは、パブリッシュ/サブスクライブメッセージングのメッセージングトピックの取得に使用します。
- **JMS File Store** コンポーネントタイプ - このコンポーネントタイプは、JMS バッキングストアの取得に使用します。
- **JMS JDBC Store** コンポーネントタイプ - このコンポーネントタイプは、JMS JDBC バッキングストアの取得に使用します。
- **JMS Connection Factory** コンポーネントタイプ - このコンポーネントタイプは、データソースに JMS 接続を作成する接続ファクトリの取得に使用します。
- **JMS Destination Key** コンポーネントタイプ - このコンポーネントタイプは、メッセージの配信の順番を指定する宛先キーの取得に使用します。
- **Mail Session** コンポーネントタイプ - このコンポーネントタイプは、管理サーバーと管理対象サーバー間の通信に使用するメールサービスの取得に使用します。

これらの構成コンポーネントタイプが必要であるのは、アプリケーションで必要とされる場合のみです。たとえば、Web アプリケーションがデータベースを使用して情報の取得と格納を行う場合、データソースまたはマルチデータソースを構成する必要があります。

これらの構成コンポーネントタイプを使用するには、実行するタスクを選択し、関連付けられたコンポーネントプロシージャを実行します。ファイルシステムのほかの場所に存在する既存のコンポーネントに基づいて新しいコンポーネントを作成およびチェックインする必要がある場合は、「Create」をクリックします。新しいコンポーネントをチェックインしたあと、適切なコンポーネントプロシージャを実行し、アプリケーションのニーズに従って WebLogic 環境を構成します。

通常は、アプリケーションを配備する前にこれらの構成コンポーネントタイプの構成と配備を行います。ただし、構成が完了したあとでアプリケーションを再起動することによってアプリケーションコンポーネントが配備されたあとに、WebLogic 環境を構成できません。アプリケーションを再起動するにはアプリケーションを再配備します。

ここでは、これらの構成オブジェクトを作成、インストール、アンインストールする方法を説明します。手順については次の項目を参照してください。

- 86 ページの「構成サービスの作成」
- 89 ページの「構成サービスのインストール」
- 92 ページの「構成サービスのアンインストール」
- 93 ページの「WebLogic 構成コンポーネントタイプと変数」

これらの構成オブジェクトの構成についての詳細は、BEA の [Administration Console Online Help](#) を参照してください

構成サービスの作成

WebLogic 環境で、構成オブジェクトを使用するには、まず、構成コンポーネントとしてサービスを取得する必要があります。ここでは、これらのオブジェクトを取得する方法を示す次の手順を提供します。

- 86 ページの「構成サービスを作成する」では、コンポーネントとして構成オブジェクトを取得する方法を説明します。
- 87 ページの「JMS Module を構成する」では、配備中に JMS Queues および Topics を構成する JMS Module を作成する方法を説明します。

▼ 構成サービスを作成する

この手順は、構成コンポーネントの作成方法を示しています。JMS Queues、Topics、Connection Factories、または Destination Keys を使用する予定の場合は、JMS Module も作成する必要があります。詳細については、87 ページの「JMS Module を構成する」を参照してください。

- 1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで、「WebLogic 9」をクリックします。

- 2 「WebLogic 9」ページの「Configuration Tasks」セクションで、取得する構成オブジェクトの「Create」リンクをクリックします。

次のいずれかの構成コンポーネントで、「Create」リンクをクリックします。

- Data Source
- Multi Data Source
- JMS Server
- JMS Queues
- JMS Topics

- JMS File Store
- JMS JDBC Store
- JMS Connection Factory
- JMS Destination Key
- Mail Session

「Components Details Edit」ページが表示されます。

- 3 コンポーネント名を指定します。
- 4 (省略可能) コンポーネントのラベルを指定します。
- 5 (省略可能) コンポーネントの説明を指定します
- 6 「**WebLogic Admin Server**」フィールドで、取得する構成サービスがある管理対象サーバーまたはクラスタを選択します。
- 7 サーバーのファイルシステムをナビゲートして、取得する構成サービスを見つけます。
- 8 「**Check-in Selected Item**」をクリックします。
- 9 「**Check-in**」ページの情報を確認して、「**Continue to Check-in**」をクリックします。

次の手順 WebLogic 環境に構成サービスを配備するには、[89 ページの「構成サービスのインストール」](#)を参照してください。

JMS Queues、Topics、Connection Factories、または Destination Keys を配備する予定の場合は、JMS モジュールを構成する必要があります。詳細については、[87 ページの「JMS Module を構成する」](#)を参照してください。

▼ JMS Module を構成する

JMS Queues、Topics、Connection Factories、または Destination Keys を使用する予定の場合は、配備中にこれらのオブジェクトを構成する JMS Module コンテナを作成する必要があります。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**WebLogic 9**」ページの「**Configuration Tasks**」セクションで、「**JMS Module: Configure**」リンクをクリックします。
「Plans Details Run」ページが表示されます。

- 3 「Plan Parameters」領域で、構成する JMS Module コンポーネントの変数設定を選択します。
- このコンポーネントに対して変数設定が指定されている場合、メニューから適切な設定を選択します。
 - メニューから設定が使用できない場合は、「Select From List」をクリックします。
「Select Variable Settings From List」ウィンドウが表示されます。
 - 変数設定の新しいセットを作成するには、「Create Set」を選択します。
次のリストに、JMS Module コンポーネントの変数のうち、更新する可能性が高い変数を示します。
- | | |
|--------------------|---|
| 変数セット名 | 必須。ユーザーが作成する新しい変数設定セットの名前 |
| Name | 必須。配備する JMS Module の名前を指定します。 |
| DescriptorFileName | 必須。JMS Module 記述子ファイルの名前を指定します。 |
| Notes | 任意。JMS Module に関する補足情報またはコメントを指定します。 |
| installName | 必須。JMS Module の配備に使用する名前を指定します。 |
| installPath | 必須。JMS Module をインストールする場所を指定します。 |
| pluginClassPath | 任意。WebLogic 9 プラグイン execJava クラスへのパスを指定します。 |
- 別のコンポーネントの変数設定を使用する場合は、「Import Set From Component」をクリックします。
「Import Variable Settings」ウィンドウが表示されます。
- a. 必要に応じて、インポートする変数設定を持つコンポーネントがあるフォルダにナビゲートします。
 - b. コンポーネントのバージョンを選択します。
-
- 注-コンポーネントのバージョンが異なると、変数設定も異なる可能性があります。現在のコンポーネントおよびインポートする変数設定があるコンポーネントは、必ず共通の変数を共有するようにしてください。変数設定のインポート元のコンポーネントと、プランで使用するコンポーネントの間で共通に使用している変数が存在しない場合、変数設定はインポートされません。
-
- c. 「Import Variable Settings」をクリックします。
変数設定がインポートされ、表形式で表示されます。

- d. 「Plan Details Run」ページの「Variable Settings」ドロップダウンリストから、インポートした変数設定を選択し、「Select」をクリックします。
- ファイルに保存されているコンポーネント変数設定を使用する場合は、次の手順に従います。
 - a. 「Import Sets from File」テキストフィールドに、使用する変数設定ファイルへのパスを入力します。
ファイルシステムをブラウズして適切なファイルを探すには、「Browse」ボタンをクリックします。
 - b. 「Import」をクリックします。
変数設定がインポートされ、表形式で表示されます。
-
- 注-変数設定のインポート元のファイルと、プランで使用するコンポーネントの間で共通に使用している変数が存在しない場合、変数設定はインポートされません。
-
- c. 「Plan Details Run」ページの「Variable Settings」ドロップダウンリストから、インポートした変数設定を選択し、「Select」をクリックします。
- 4 ターゲットホストまたはターゲットホストセットを選択します。
管理対象サーバーまたは WebLogic クラスタのいずれかをターゲットに設定します。

注-ターゲットホストは、com.sun.weblogic#DeploymentTargetHS ホストセットのメンバーである必要があります。

- 5 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

構成サービスのインストール

構成コンポーネントを作成したあとは、管理サーバーにこれらのサービスを配備できます。

構成コンポーネントをインストールすると、インストールパスに基づいてファイルまたはディレクトリがファイルシステムにコピーされます。コピーが完了すれば、ファイルまたはディレクトリは WebLogic 管理サーバーに登録されます。

「component Details」ページにナビゲートし、Install コンポーネントプロシージャを実行することにより、コンポーネントをインストールできます。多くのコンポーネントで

は、一部のコンポーネント変数を編集する必要があります。カスタム値が必要な変数については、93 ページの「[WebLogic 構成コンポーネントタイプと変数](#)」を参照してください。

▼ 構成サービスをインストールする

ここでは、次のコンポーネントのインストール方法を説明しています。

- Data Source
- Multi Data Source
- JMS Server
- JMS Queues
- JMS Topics
- JMS File Store
- JMS JDBC Store
- JMS Connection Factory
- JMS Destination Key
- Mail Session

始める前に JMS Queues、Topics、Connection Factories、または Destination Keys をインストールする場合は、まず、これらのコンポーネントの構成情報を保持する JMS Module を構成する必要があります。詳細については、87 ページの「[JMS Module を構成する](#)」を参照してください。

- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 2 「**Components**」リンクをクリックします。
「Components」ページが表示されます。
- 3 配備する構成コンポーネントの場所にナビゲートします。
「Change Folder」リンクをクリックしてファイルシステムを通じて参照し、構成コンポーネントの場所を選択します。
- 4 「**Component**」列で、配備する構成コンポーネントをクリックします。
「Components Details」ページが表示されます。
- 5 「**Component Procedures**」表の「**install: Default**」行で「**Run**」リンクをクリックします。
「Plans Details Run」ページが表示されます。

- 6 「Plan Parameters」領域で、配備する構成コンポーネントの変数設定を選択します。各構成コンポーネントに必要な変数については、93 ページの「WebLogic 構成コンポーネントタイプと変数」を参照してください。
- このコンポーネントに対して変数設定が指定されている場合、メニューから適切な設定を選択します。
 - メニューから設定が使用できない場合は、「Select From List」をクリックします。「Select Variable Settings From List」ウィンドウが表示されます。
 - 変数設定の新しいセットを作成するには、「Create Set」を選択します。インストールに適した変数値を指定します。
 - 別のコンポーネントの変数設定を使用する場合は、「Import Set From Component」をクリックします。「Import Variable Settings」ウィンドウが表示されます。
 - a. 必要に応じて、インポートする変数設定を持つコンポーネントがあるフォルダにナビゲートします。
 - b. コンポーネントのバージョンを選択します。

注-コンポーネントのバージョンが異なると、変数設定も異なる可能性があります。現在のコンポーネントおよびインポートする変数設定があるコンポーネントは、必ず共通の変数を共有するようにしてください。変数設定のインポート元のコンポーネントと、プランで使用するコンポーネントの間で共通に使用している変数が存在しない場合、変数設定はインポートされません。

- c. 「Import Variable Settings」をクリックします。変数設定がインポートされ、表形式で表示されます。
 - d. 「Plan Details Run」ページの「Variable Settings」ドロップダウンリストから、インポートした変数設定を選択し、「Select」をクリックします。
- ファイルに保存されているコンポーネント変数設定を使用する場合は、次の手順に従います。
 - a. 「Import Sets from File」テキストフィールドに、使用する変数設定ファイルへのパスを入力します。ファイルシステムをブラウズして適切なファイルを探すには、「Browse」ボタンをクリックします。

- b. 「**Import**」をクリックします。
変数設定がインポートされ、表形式で表示されます。

注 - 変数設定のインポート元のファイルと、プランで使用するコンポーネントの間で共通に使用している変数が存在しない場合、変数設定はインポートされません。

- c. 「**Plan Details Run**」ページの「**Variable Settings**」ドロップダウンリストから、インポートした変数設定を選択し、「**Select**」をクリックします。
- 7 ターゲットホストまたはターゲットホストセットを選択します。
 - 8 「**Plan Parameters**」セクションで、インストールプランで使用するオプションをすべて指定します。
 - 9 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

構成サービスのアンインストール

必要に応じて、管理サーバーから構成サービスをアンインストールできます。

構成コンポーネントをアンインストールすると、マスターサーバーからファイルまたはディレクトリが削除されます。

「component Details」ページにナビゲートし、Uninstall コンポーネントプロシージャを実行することにより、構成コンポーネントをアンインストールできます。

▼ 構成サービスをアンインストールする

ここでは、次のコンポーネントをアンインストールする方法を説明しています。

- Data Source
 - Multi Data Source
 - JMS Server
 - JMS Queue
 - JMS Topic
 - JMS File Store
 - JMS JDBC Store
 - JMS Connection Factory
 - JMS Destination Key
 - Mail Session
- 1 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**WebLogic 9**」をクリックします。

- 2 「**Components**」リンクをクリックします。
「Components」ページが表示されます。
- 3 アンインストールする構成コンポーネントの場所にナビゲートします。
「Change Folder」リンクをクリックしてファイルシステムを通じて参照し、構成コンポーネントの場所を選択します。
- 4 「**Component**」列で、アンインストールする構成コンポーネントをクリックします。
「Components Details」ページが表示されます。
- 5 「**Component Procedures**」表の「**Uninstall: Default**」行で「**Run**」リンクをクリックします。
「Plans Details Run」ページが表示されます。
- 6 ターゲットホストまたはターゲットホストセットを選択します。
- 7 「**Plan Parameters**」セクションで、アンインストールプランで使用するオプションをすべて指定します。
- 8 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

WebLogic 構成コンポーネントタイプと変数

ここに示す各項目では、コンポーネントタイプとしてモデル化された各 WebLogic 構成オブジェクトを示します。デフォルトのコンポーネント名、およびカスタム値が必要なコンポーネント変数も示してあります。

Data Source および Multi Data Source コンポーネントタイプと変数

WebLogic9 プラグインは、データベースデータソースおよび接続プールを取得する Data Source および Multi Data Source コンポーネントタイプを提供しています。これらのコンポーネントタイプに必須のコンポーネント変数を次の表に示します。

表 5-2 Data Source および Multi Data Source コンポーネント情報と変数

コンポーネントタイプ	説明	必須の変数
Data Source	アプリケーションのデータベースデータソースを指定します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ データソース名 (Name) ■ JNDI 名 (JNDINames)

表 5-2 Data Source および Multi Data Source コンポーネント情報と変数 (続き)

コンポーネントタイプ	説明	必須の変数
Multi Data Source	アプリケーションのデータベースデータソースと関連付けられた接続プールを指定します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ マルチデータソース名 (Name) ■ マルチデータソース用のアルゴリズムの種類で、Failover または Load-Balancing のいずれか (AlgorithmType) ■ コンマで区切られたデータソースのリスト (DataSourceList) ■ JNDI 名 (JNDINames)

これらのコンポーネントタイプを作成、配備する方法については、[85 ページ](#)の「[WebLogic アプリケーションのサービスの構成](#)」を参照してください。

Java Messaging Service (JMS) コンポーネントと変数

WebLogic 9 プラグインは、JMS 構成コンポーネントを取得するいくつかの Java Messaging Service (JMS) コンポーネントタイプを提供しています。これらのコンポーネントまたはコンポーネントタイプに必須のコンポーネント変数を次の表に示します。

表 5-3 JMS コンポーネント情報と変数

コンポーネントタイプ	説明	デフォルトのコンポーネント	必須の変数
JMS Server	JMS 情報を保存、供給するサーバーを指定します。	WLJMSServerConfig	JMS サーバー名 (Name)
JMS Module	JMS Queues、Topics、Connection Factories、および Destination Keys の構成モジュールを指定します。	なし	<ul style="list-style-type: none"> ■ JMS Module の名前 (Name) ■ JMS Module 記述子ファイル (DescriptorFileName)
JMS Queue	ポイントツーポイントメッセージングのメッセージングキューを指定します。	WLJMSQueueConfig	<ul style="list-style-type: none"> ■ JMS 宛先名 (Name) ■ JMS モジュール名 (JMSModuleName) ■ JMS 宛先の JNDI 名 (JNDIName)

表 5-3 JMS コンポーネント情報と変数 (続き)

コンポーネントタイプ	説明	デフォルトのコンポーネント	必須の変数
JMS Topic	パブリッシュ/サブスクライブメッセージングのメッセージングトピックを指定します。	WLJMSTopicConfig	<ul style="list-style-type: none"> ■ JMS 宛先名 (Name) ■ JMS モジュール名 (JMSModuleName) ■ JMS 宛先の JNDI 名 (JNDIName)
JMS File Store	JMS バックイングストアを指定します。	WLJMSFileStoreConfig	JMS ファイルストアの名前 (Name)
JMS JDBC Store	JMS JDBC バックイングストアを指定します。	WLJMSJDBCStoreConfig	<ul style="list-style-type: none"> ■ JMS JDBC ストア (Name) ■ JDBC ストアが使用する JDBC データソース (DataSource)
JMS Connection Factory	データベースソースへの JMS 接続を作成する接続ファクトリを指定します。	WLJMSConnectionFactoryConfig	<ul style="list-style-type: none"> ■ JMS 接続ファクトリの名前 (Name) ■ JNDI 名 (JNDIName)
JMS Destination Key	メッセージ配信の順序を指定する宛先キーを指定します。	WLJMSDestinationKeyConfig	JMS 宛先キーの名前 (Name)

これらのコンポーネントタイプを作成、配備する方法については、[85 ページ](#)の「WebLogic アプリケーションのサービスの構成」を参照してください。

Mail Session コンポーネントタイプと変数

WebLogic 9 プラグインを使用して、N1 SPS コンポーネントとしてメールセッションを取得し、これらのコンポーネントを配備できます。これらのコンポーネントに必須のコンポーネント変数を次の表に示します。

表 5-4 Mail Service コンポーネント情報と変数

コンポーネントタイプ	説明	必須の変数
Mail Service	管理サーバーと管理対象サーバー間の通信に使用するメールサービスを指定します。	<ul style="list-style-type: none"> ■ メールセッション名 (msName) ■ JNDI 名 (jndiName) ■ メールセッションのプロパティの WebLogic 値から生成された変数

このコンポーネントタイプを作成、配備する方法については、85 ページの「WebLogic アプリケーションのサービスの構成」を参照してください。

CLIを使用したWebLogicの作業

プロビジョニングシステムを介してWebLogicで作業を行う場合、Sun N1 Service Provisioning System コマンド行とWebLogic コマンド行の2つのコマンド行を使用できます。

Sun N1 Service Provisioning System コマンド行インタフェースの使用法

デフォルトでは、プロビジョニングシステムのコマンド行インタフェースは次のディレクトリにあります。

```
/opt/SUNWn1sps/N1_Service_Provisioning_system_5.2/cli/bin/cr_cli.
```

BEA WebLogic 9 プラグインオブジェクトは、/com/sun/weblogic9 フォルダにあります。

ほかのカスタムコンポーネントやプランとほぼ同じように、プラグインコンポーネントやプランを操作できます。ただし、コンポーネントまたはプランに変更を加える場合、コンポーネントまたはプランを新しいフォルダに保存し、そのフォルダで変更を行う必要があります。プロビジョニングシステム コマンド行インタフェースの使用に関する詳細は、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 コマンド行インタフェース (CLI) リファレンスマニュアル』の第1章「コマンド行インタフェースの使用」を参照してください。

WebLogic コマンド行インタフェースの使用法

WebLogic コマンド行は、「WebLogic 9 Common Task」ページからアクセスできます。WebLogic 9 のコマンド行インタフェースに関する詳細は、BEA の Web サイトにある [WebLogic Server Command Reference](#) を参照してください。

▼ Sun N1 Service Provisioning System を介して WebLogic コマンド行インタフェースを使用する

任意の管理サーバーまたは管理対象サーバーで WebLogic コマンドを実行できます。

- 1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで「WebLogic 9」をクリックします。
- 2 管理サーバーと管理対象サーバーのどちらでコマンドを実行するかを選択します。
 - 管理サーバーでコマンドを実行する場合は、「Domain Management: Start」をクリックします。

- 管理対象サーバーでコマンドを実行する場合は、「**Application Server Management: Start**」をクリックします。

「component Details」ページが表示されます。

- 3 「Run-cli」コンポーネントプロシージャを選択し、「**Run**」をクリックします。プランの「Run」ページが表示されます。
- 4 CLIを実行するAdminServer仮想ホストまたは管理対象サーバー仮想ホストを選択し、「**Run Selected Installations**」をクリックします。

- 5 プラン変数のフィールドに必要な情報を入力します。

多くのプラン変数には情報が必要ないため、空白のままにしておくことができます。次の表で、オプション変数を説明します。

コマンドのSSL引数

サーバーへの接続にSSLを使用しない場合、この変数は無視しても構いません。

コマンドのターゲットを表示または修正する適切なアクセス権が必要なユーザーの名前
これはユーザー名の変数です。ユーザー名とパスワードの変数は、ユーザー構成ファイルおよびキーファイル変数と相互に排他的です。ユーザー名およびパスワードと、ユーザー構成ファイルおよびキーファイルの場所のどちらかを指定します。

ユーザー名と関連付けられたパスワード

これらはパスワード変数です。ユーザー名とパスワードの変数は、ユーザー構成ファイルおよびキーファイル変数と相互に排他的です。ユーザー名およびパスワードと、ユーザー構成ファイルおよびキーファイルの場所のどちらかを指定します。

暗号化されたユーザー名とパスワードが含まれる、ユーザー構成ファイルの名前と位置
これはユーザー構成ファイル変数です。ユーザー名とパスワードの変数は、ユーザー構成ファイルおよびキーファイル変数と相互に排他的です。ユーザー名およびパスワードと、ユーザー構成ファイルおよびキーファイルの場所のどちらかを指定します。

キーファイルの名前と位置

これはキーファイル変数です。ユーザー名とパスワードの変数は、ユーザー構成ファイルおよびキーファイル変数と相互に排他的です。ユーザー名およびパスワードと、ユーザー構成ファイルおよびキーファイルの場所のどちらかを指定します。

- 6 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

例 5-1 コマンド行インタフェースの使用法

次の例ではWebLogic FORCESHUTDOWN コマンドを使用して、各Run-cli プラン変数の入力を説明します。

実行する Weblogic CLI (weblogic.Admin または weblogic.Deployer):	weblogic.Admin
コマンドの SSL 引数:	
コマンドを実行するサーバーインスタンスの待機アドレス:	sun03 「これは AdminServer の名前です。」
コマンドを実行するサーバーインスタンスの待機ポート:	7001
コマンドのターゲットを表示または修正する適切なアクセス権が必要なユーザーの名前:	admin
ユーザー名と関連付けられたパスワード:	xxxxxx
暗号化されたユーザー名とパスワードが含まれる、ユーザー構成ファイルの名前と場所:	
キーファイルの名前と場所:	
実行するコマンドの名前:	FORCESHUTDOWN
コマンドの引数:	Server-one

Sun N1 Service Provisioning System 内での WebLogic Server Scripting Tool の使用法

プロビジョニングシステムのブラウザインタフェースからは WebLogic Server Scripting Tool (WLST) を使用できます。WLST を使用して管理タスクと構成変更を行う方法の詳細は、BEA の WebLogic Server の [Using the WebLogic Server Scripting Tool](http://dev.bea.com/code/library/code/wlst.jsp) (<http://dev.bea.com/code/library/code/wlst.jsp>) を参照してください。

▼ WebLogic スクリプトコンポーネントを作成する

まず、WebLogic スクリプトを作成し、次に N1 SPS コンポーネントとしてスクリプトをチェックインしてからインストールします。この手順は、ファイルシステムで使用可能な既存の WLST スクリプトがあることを前提にしています。

- 1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで、「Create New Component」リンクをクリックします。
「Components」表が表示されます。
- 2 「Action」列の「Create」リンクをクリックします。
「Component Details Edit」ページが表示されます。
- 3 「Component」フィールドに、コンポーネントの名前を入力します。

- 4 「Type」ドロップダウンメニューから「com.sun.weblogic9#WLSTScript」を選択します。
- 5 (省略可能)コンポーネントのラベルと説明を入力します。
- 6 ファイルシステム内でWebLogicスクリプトファイルのコピーがあるホストを選択します。
- 7 ホスト上のスクリプトの場所にナビゲートします。
- 8 コンポーネントに適したオプションを選択します。
アプリケーションには、次のオプションを設定できます。
 - 前回のチェックインから変更のないスクリプトコンポーネントをチェックイン。
 - スクリプトコンポーネントにユーザーおよびグループの所有アクセス権を割り当て。
 - スクリプトコンポーネントを構成テンプレートとして指定できます。「Configuration Template」チェックボックスにチェックすると、スクリプトコンポーネントおよびすべての関連付けられたコンポーネントを保持するコンテナに、スクリプトコンポーネントのすべてのコンポーネント変数が追加されます。その後は、このコンテナを使用してアプリケーションを配備するときに、これらの変数を編集できます。
- 9 「Path of the Resource Descriptor File」フィールドに、コンポーネントのリソース記述子ファイルへのパスを入力します。
リソース記述子ファイルは、コンポーネントのリソースを構成するファイルとディレクトリに使用する、所有者、グループ、およびアクセス権の設定を指定します。リソース記述子についての詳細は、『Sun N1 Service Provisioning System 5.2 XMLスキーマリファレンスガイド』の「リソース記述子ファイルの使用」を参照してください。
- 10 「Check In Selected Item」をクリックします。
コンポーネントの「Check In」ページが表示されます。
- 11 編集アクセス権を持っているフォルダを選択します。
- 12 「Continue to Check In」をクリックします。

▼ WebLogic スクリプトコンポーネントをインストールする

始める前に WebLogic スクリプトコンポーネントをインストールするには、プロビジョニングシステム内にスクリプトコンポーネントが存在する必要があります。98 ページの「WebLogic スクリプトコンポーネントを作成する」を参照してください。

- 1 ブラウザインタフェースの「Common Tasks」セクションで「WebLogic 9」をクリックします。

- 2 ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで、「**Components**」リンクをクリックします。
「Components」表が表示されます。
- 3 必要に応じて、スクリプトコンポーネントを含むディレクトリにナビゲートします。
- 4 インストールする **WLSTScript** コンポーネントの行で「**Details**」をクリックします。
コンポーネントの「Details」ページが表示されます。
- 5 「**Component Procedures**」表で「**Default: Install**」プロシージャを選択し、「**Run**」をクリックします。
プランの「Run」ページが表示されます。
- 6 ターゲットホストを選択します。
AdminServer の仮想ホストをターゲットにします。
- 7 (省略可能) ソフトウェアをインストールした **WebLogic** ユーザーの名前を「**RunAs**」フィールドに入力します。
このユーザーは、ソフトウェアインストールプランで使用される `webLogicUser` 変数によって表されます。
- 8 「**Run Plan (includes preflight)**」をクリックします。

プランの使用法

WebLogic 9 プラグインは、管理サーバー、管理対象サーバー、およびクラスタのインストールと削除に関連する数多くのタスクの実行を、プランに依存しています。

BEA WebLogic 9 プラグインのプランは `/com/sun/weblogic9` フォルダにあり、「Common Tasks」ページからリンクされています。

障害追跡

プロビジョニングソフトウェアを介して WebLogic を管理する際に問題が発生した場合、通常は画面にメッセージが表示され、問題が存在することが通知されます。

```
Problems encountered during plan run or preflight
The plan (or preflight) "/com/sun/weblogic9/InstallAdminServerPlan"
finished with 1 failed host(s). (017034)
Unable to find session variable "WL_DEFAULT_PASSWORD" (Unresolved
session variable WL_DEFAULT_PASSWORD. This session variable was
automatically created when the system was unable to find it.).
Add this session variable and try the operation again. (040111)
```

この例のメッセージは理解しやすいものですが、すべてのメッセージがこのように分かりやすいものとは限りません。

次のメッセージは、管理サーバー上の JMX インタフェースが使用不可能であったか、プラグイン情報が正しくないことを意味しています。

```
Admin Server adminHost JMX interface
  running on port portNumber is not available;
Admin Server must be running for this operation.
```

特定の問題に関する詳細な情報を調べるには、最終的なエラーブロックに到達するまで「Run History Details」リンクをたどります。エラー状態の詳細については、stderr および stdout の出力を表示します。

WebLogic のインストールのエラーメッセージの例

この節では、WebLogic のインストール時に表示される可能性があるエラーメッセージの例を示します。

例 5-2 不正なユーザーのメッセージ

```
The user specified is not a valid system users: weblogic (017056)
```

システムユーザー「weblogic」を作成するか、Install 変数 weblogicUser を既存のユーザーに変更する必要があります。

例 5-3 ターゲットホストのエラーメッセージ

```
Specified target(s) "sol01" were not in the required host set
"com.sun.weblogic9#SupportedHS". (017087)
```

このエラーメッセージには 2 つの原因が考えられます。

- ホストは、プラグインと互換性があるオペレーティングシステムをサポートしていない。
この場合は、プラグインによりサポートされているオペレーティングシステムを使用するホストを選択します。
- ホストの準備ができていない。
この場合は、「Hosts」ページにアクセスし、ホストの準備を行います。

例 5-4 起動ステップでのエラーメッセージ

```
Error: Installation could not be preformed check the deployment details
for more information.
```

例 5-4 起動ステップでのエラーメッセージ (続き)

最終的な `execNative` コントロールの配備の詳細をチェックし、WebLogic インストーラからの情報を調べる必要があります。

次のメッセージは、`stdout` の出力に含まれている可能性があるメッセージの例です。

- `SilentBEAHomeTask - Access to the directory is denied: [/usr/local/boa]`

このメッセージが表示された場合、インストールプランで指定されている WebLogic ユーザーは、`boaHome` ディレクトリの作成アクセス権または書き込みアクセス権を持っていません。ディレクトリのアクセス権を変更するか、プロビジョニングシステムのディレクトリコンポーネントを使用して `boaHome` ディレクトリを作成できます。

- `SilentBEAHomeTask - At least one item must be selected.`

このメッセージが表示された場合、WebLogic のインストールがすでにこのパスに存在しています。パスを変更するか、既存の WebLogic インストールをアンインストールする必要があります。



高度なドメイン管理作業

この付録では、WebLogic ドメインで高度な管理作業を行う方法について説明しています。この付録では、次の項目について説明します。

- 103 ページの「異なるパスワードでのドメインの作成」
- 104 ページの「ドメインに対する変更の管理」

異なるパスワードでのドメインの作成

▼ 異なるパスワードを使用して複数のドメインを作成する

同じユーザーとパスワードを使用して複数のドメインを作成できます。ただし、各ドメインに異なるパスワードを使用する場合は、各ドメインのインストール後に WebLogic ユーザーおよびパスワードセッション変数を更新する必要があります。

新しいドメインを作成するプランは、必ずデフォルトセッション変数名 WL_DEFAULT_USER および WL_DEFAULT_PASSWORD を使用します。

- 1 デフォルトの **WebLogic** セッション変数 WL_DEFAULT_USER および WL_DEFAULT_PASSWORD を使用して、新しいドメインと **AdminServer** をインストールします。
28 ページの「WebLogic 9 ドメインと管理サーバーを作成する」を参照してください。
- 2 ブラウザインタフェースの最上部の「**Session Variables**」をクリックして、「**Session Variables**」ページにアクセスします。
- 3 新しくインストールされた **AdminServer** の新しいセッション変数を作成します。
これらの新しいセッション変数の値は、AdminServer のインストールに使用したデフォルトの変数と同じ値です。

属性名	デフォルトのセッション変数名	新しいセッション変数名
adminUser	WL_DEFAULT_USER	WL_TEST_USR
adminPassword	WL_DEFAULT_PASSWORD	WL_TEST_PWD

- 手順1で作成した **AdminServer** の「**host Details**」ページにアクセスし、「**Edit**」をクリックします。
- AdminServer** のホストタイプ属性を更新します。
たとえば、adminUser 値を :[session:WL_TEST_USR] に置き換えます。
- 別のドメインをインストールする場合は「**Session Variables**」ページに戻り、デフォルトの **WebLogic** セッション変数を、インストールする次のドメインに使用する新しい値で更新します。

ドメインに対する変更の管理

▼ ドメインおよび管理サーバーに対する変更を管理する

- ブラウザインタフェースの「**Common Tasks**」セクションで「**WebLogic 9**」をクリックします。
- 「**Components**」リンクをクリックします。
- 必要に応じて、com/sun/weblogic9 コンポーネントディレクトリにナビゲートします。
WebLogic 9 コンポーネントの表が表示されます。
- 「**Component**」列で、**AdminServer** コンポーネントをクリックします。
「AdminServer Component Details」ページが表示されます。
- 「**Component Procedures**」表で、**domainUtil** プロシージャの「**Run**」リンクをクリックします。
「Plans Details Run」ページが表示されます。
- 「**Current Installations**」リストから、更新する管理サーバーを選択します。
- 「**Run Selected Installations**」をクリックします。
この更新で自動生成されたプラン用に「Plans Details Run」ページが表示されます。

- 8 「Plan Variables」テキストフィールドに、実行する適切な更新ユーティリティーを入力します。

次の値から、1つ以上を指定します。

- activate – この変数は、WebLogic ドメインのすべての変更を有効にします。
- undoAndStop – この変数は、WebLogic ドメインに対するすべての変更を元に戻し、サーバーを停止します。
- stopEdit – この変数は、WebLogic ドメインに対するすべての変更を中止します。
- cancelEdit – この変数は、WebLogic ドメインに対するすべての変更を取り消します。
- undoUnactivatedChanges – この変数は、WebLogic ドメインで有効にされていない変更を元に戻します。
- undo – この変数は、WebLogic ドメインに対するすべての変更を元に戻します。

- 9 必要に応じて、任意のオプションおよび制限を変更します。

- 10 「Run Plan (includes preflight)」をクリックします。

索引

C

アプリケーションアーカイブコンテナ, 65-69

D

Data Source コンポーネント, 作成, 86-89

E

EAR, 「アプリケーションアーカイブ」を参照

EJB の取得, 65-69

プラン

アプリケーションアーカイブコンポーネントとグループ化, 65-69

J

JAR ファイル, 17-19

アプリケーションアーカイブ

配備プランとグループ化, 65-69

Java アーカイブ, 「JAR ファイル」を参照

JMS Connection Factory コンポーネント, 作成, 86-89

JMS Destination Key コンポーネント, 作成, 86-89

JMS File Store コンポーネント, 作成, 86-89

JMS JDBC Store コンポーネント, 作成, 86-89

JMS Queue コンポーネント, 作成, 86-89

JMS Topic コンポーネント, 作成, 86-89

JMS サーバーコンポーネント, 作成, 86-89

M

Mail Session コンポーネント, 作成, 86-89

Multi Data Source コンポーネント, 作成, 86-89

W

WAR, 「アプリケーションアーカイブ」を参照

WebLogic コマンド行インタフェース, 96-98

WebLogic ソフトウェア, インストール, 20-24

Web アプリケーション, 取得, 62-63

Web アプリケーションの取得, 62-63

配備プラン

取得, 63-64

あ

アプリケーションアーカイブ

コンポーネントタイプ, 69

い

インストール, WebLogic ソフトウェア, 20-24

え

エンタープライズアプリケーション, 取得, 62-63

アプリケーションアーカイブ

取得, 62-63

エンタープライズアプリケーションの取得, 62-63

か

管理サーバー, 削除, 50-51

き

起動, クラスタ, 52-53

く

クラスタ

起動, 52-53

削除, 53

停止, 52-53

離脱, 54

クラスタメンバー, 削除, 54

こ

コマンド行インタフェース, WebLogic, 96-98

コンポーネントタイプ

アプリケーションアーカイブ, 69

トランザクションデータソース, 86-89

配備プラン, 69

プランコンテナとともにあるアプリケーション
アーカイブ, 69

構成サービス, 作成, 86-89

さ

削除

「削除」を参照

管理サーバー, 50-51

クラスタ, 53

クラスタメンバー, 54

ドメイン, 50-51

し

取得配備プラン, 63-64

使用, プラン, 100

障害追跡, 説明, 100-102

て

停止, クラスタ, 52-53

と

ドメイン, 削除, 50-51

は

配備サーバーの要件, 13-14

配備プラン

コンポーネントタイプ, 69

ふ

プラグイン

インポート, 19-24

内容, 11-12

配備サーバーの要件, 13-14

パッチ適用, 24

プラグインのインポート, 19-24

プラグインファイル

インポート, 19-24

の場所, 17-19

プラグインへのパッチ適用, 24

プラン

取得, 63-64

使用, 100

プランコンテナとともにあるアプリケーションアー
カイブ, コンポーネントタイプ, 69

り

離脱, クラスタ, 54